

川柳塔

昭和五十二年三月二十一日発行
 創刊大正十三年三月二十一日発行
 通卷 五九八号

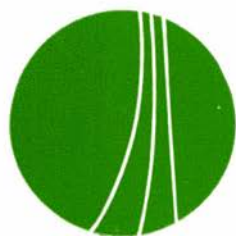


日川協加盟

No. 598

三月号

麻生路郎先生 13回忌厳修と 「旅人」とその後の 作品普及版刊行記念



誌寿六百号記念

川柳
大会

日 時 昭和52年5月8日(日)

午後1時

会 場 森ノ宮労働会館

(環状線森ノ宮駅、又は地下鉄森ノ宮駅下車スグ)

司 会

西 田 柳宏子

開会の辞

川 村 好 郎

第 1 部

挨 拶

中 島 生々庵

講 演

東 野 大 八 氏

堀 口 塊 人 氏

兼 題

「家 族」 田 中 秀 果氏選

「趣 味」 増井不二也氏選

第 2 部

講 演

右 城 暮 石 氏

小野 十三郎 氏

兼 題

「 信 」 三条東洋樹氏選

「ワンマン」 近江 砂人 氏選

「旅 人」 西 尾 槲 選

閉会の辞

若 本 多久志

会 費

1,000円 (句集「旅人」普及版呈)

懇 親 宴

2,000円 (前号を訂正)

主 催 川 柳 塔 社

せ つ ぶ ん

生まぬるい吹き溜り明日の灯を信じ

孫と豆撒く老醜を笑うまじ

過去のあやまち影絵遊びのように跳ね

棄て猫に今日は祈る顔が消え

妻の留守煮つまった鍋に無為無策

2月3日、所要あつて京都の四条を歩いた。

この頃私の住む大阪のミナミでは、節分というのに、そうした気分は殆ど湧かない。京都に来て同じである。

昔なつかしと言うではないが、鰯の頭を戸口につきさしたり、鬼打豆を撒いたりとはともかく、厄除けにする赤いてがらのオバケや大丸鬻やらが、電車の中でも心齋橋筋でも巾をきかしていたもの。

それが、颯爽とブーツ姿で鬼どもを蹴ちらそうと世相は変る。寔にたのしい限りではある。

中 島 生 々 庵

川 柳 塔 三 月 号

座右の句

俺に似よ 俺に似るなと子を思い

(路 郎)

私の句

教会で洗ったいのち又汚し

出 原 敬 一

川柳塔 三月号 目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

せつぶん

一句を考える

俳風柳多留廿五篇研究

(十四)

清 博美・八木敬一・紀内恒久・青木迷朗・西原 亮
鈴木 黄・室山三柳・入江 勇・岡田 甫

川柳塔 (同人作品)

水 煙 抄

麻生路郎物語

(27)

秀句鑑賞

… (同人吟)
… (水煙抄)

「旅人」以後の麻生路郎作品

古川柳現代解釈法

愛染帖

中島生々庵 (1)

戸田古方 (2)

若本多久志選 (4)

川村好郎選 (30)

東野大八 (21)

菊沢小松園 (29)

小浜牧人 (42)

傍島静馬 (38)

香川醉々 (44)

正本水客選 (40)

一句を考える

戸田古方

「釈迦のミス金即空を言い忘れ」

もし、選者を委嘱され、持ってこられた出句の中に、この句を見つけたとして、私はどう扱ったのだろうか。

この句は、五二年度新年号の「大法輪」公募「川柳」で、石原青龍刀氏が「天位」に推されたものである。立派な社会批判の句であることには間違いない。大向うが喜びそうなる諷刺があるからであろう。青龍刀氏は「川柳的批判から衝いた空前の快作」と評している。

同誌に並んで発表されている、中村汀女氏の俳句の「天位」に

「脚つぎて朝顔の蔓おろしけり」

がある。近頃、一部の柳人は「川柳は本源の姿を失って、次第に俳句化しつつある」という。論者の如く、川柳が俳句化し、俳句が川柳化していることも事実である。

「トウシロウ」というか、素人評で「川柳はズバリ批判や諷刺をするから面白い」と新聞川柳をはめる声をきく。一方、上記の「釈迦のミス」のような句を見て、露骨すぎ、全

いのちもいらぬ名もいらぬ

鈴木敏也先生と私

女シリーズ

一分間の柳論

雅号ぶっちゃけばなし

初歩教室

大萬川柳「予告」

柳界展望

同人名簿その後の変更分

本社二月句会

各地柳壇（佳句地10選）

「緑」

一路集「婦人」

「彼岸」

編集後記

戸田 古方 (26)

石崎 柳石 (27)

菊沢 小松園 (43)

仲どんたく (43)

岩井 本蔭棒 (37)

本田 恵二朗 (48)

川村 好郎選 (50)

(庸佑・整理) (52)

不田 一三夫選 (55)

八木 千代選 (59)

野坂 つき子選 (46)

小野 克枝選 (47)

(一三夫・葉子) (65)

座右の句

灯台の夕陽 神話を抱きよせる

私の句

どん尻の懸命な子に拍手する

(緑之助)

板垣 草丘

く、詩が感ぜられないという人もあろう。

また、「金即是空」、金の盲者がうようよしている現実を見極めたところに、川柳の詩が厳然と存すると弁護する人もある。甘い詩の外に、辛い詩という見方もあっていいと思われる。

論は兎角、「詩」ということばが適当でないとするならば「味」と置き換えてもいい。「釈迦のミス」の句に、それなら「味」が感ぜられるであらうか。

おそらく、初心の人がこの句を見たとき、「詩」や「味」なんかはどうあろうと、膝を叩いて、「うまいこというてある。これでこそ川柳だ」と感心するだろう。だが、川柳は長い伝統の中で成長をつづけ、いくたびかの脱皮を今も繰返しているにちがいない。たしかに、そうした中で、この句は、川柳の原点への反省を促してくれている。

「人間陶冶の詩」という師の遺訓を守り、私なりの個性というか、「笑いは笑えそうに思われぬところ」にある。真剣に生きる心眼のみが真の笑いをみつけ出す」という信念に少々固まり過ぎていわせぬかと、この句に向き合ったとき、私は反省させられる。

だが、このように、何もかも是認しながらも、この句の堅さというか、余韻、余白の乏しさに、いささかの抵抗を感じる私はひとりである。

妄言多謝



若本多久志選

大阪市 小出智子

ひとに逢うときめきがある春の傘
早春の風に騙されやすくなる

想い出に古い盥が置いてある

朝の夫婦になにかが少し欠けている

楽器屋も花屋も応援してくれる

二十五時夫の所在を考える

神戸市 小浜牧人

履歴書の一行ひたすらに歩く

落丁の埋まらぬままで老いゆくか

てのひらを開くと夢は消えていた

檻の中の目は哀しみを溜めている

生きてゆく怖れに群れて渡り鳥

冬の絵の白は哀しい彩で描く

貝塚市 野坂つき子

弓先に引いて負けたなと思ひ

泣いて勝つ手の内とくに見すかさ

れ運悪い女を見てる冬の月

なにもかも捨ててしまえば笑えそう

うたかたの夢見つづけて耐えてみる

残酷な言葉が一つ置いてある

青森市 工藤甲吉

幹の太さよ人間のはかなさよ

東洋の音でごうんと鐘は鳴る

うたかたの一粒ずつが競い合い

枕辺へ亡妻語らいに来てくれる

鱈ちりを囲み吹雪もすてがたし

(妻の忌)

倉敷市 水粉千翁

人生を語ってまわり道たのし

錆びている愛の呼吸が犯されず

悠久の瞬間を炎ゆ初日の出

問うも又聞くと明治は捨てられず

大山の孤高に翳るものがない (明地峠から望む)

岡山県 嘉数千代香

天地汚染 童話をガラス箱に詰め

火種まもる女に北風容赦せず

私に聞かせる小さなひとりごと
実印を押せば鎖が重くなる
恍惚が唄う あの日の子守唄

八尾市 高杉 鬼遊

もんろうのゆれに男が生きかえる
玉三郎妻も女も消されそう
噴水の上で不安な恋になる
愛ならず働らく妻の肩をもむ
モーニング着たい男の天皇制

倉敷市 小野 克枝

シナリオの無い人生に朝がくる
母ごろ広くありたい米を研ぐ
打ち明けてから太陽が丸くなる
人の世に誰はばからぬ影二つ
試されたことで女が強くなり

守口市 羽原 静歩

残り糸 ぐるぐる巻いて寡婦となる
春寒の廊下に辞表抱いている
雑巾をしぼり家風へとけてゆく
七曲りしていた道が懐しい
春菊のおつゆで今日を労わりあう

新宮市 大矢 十郎

鈴の紐切れぬ太さは神の智慧
国民の中の住民旗を振り
物価高隣は何を食う人ぞ

義足とも知らず野良猫逃げてゆき
赤札で買った差額は寿司を食べ

大阪市 本多 柳志

今年こそ炎えて見る気の屠蘇の酔い
ひげ剃って今日の鬘志を整える
さんま焼く妻には詩もないと見え
園の浮いた序文が罪な新刊書
蛇に見え竜にも見えて年賀状

倉敷市 小幡 里風

先頭へ距離を詰めてる白い息
実力を小出しに笑っている夫婦
乱発の手形を叱るちびた判
御祝儀がまだ跳ねている桜鯛
一鞭を当てて見たいと思う日も

竹原市 山内 静水

皆さんのお蔭体験談なら話せ
父の歳はるかに罰があたりそう
嫁の目を盗んで孫にしたキッス
すやすやと眠るしゃぶつてみたい孫
ご親切かたじけなくも腹も立ち

竹原市 三宅 不朽

神々のロマンへつづく伊良湖崎
釣橋を渡る花束振り向かず
飲みんさい飲みんさいと妻の里
雪しんしん素直に素直になってくる

みず子仙女情哀詩の吹曝

藤井寺市

西

いわを

京菓子は茶巾しぼりのふくらみに

上気して霧氷を齧る山の怪

落城を思わすように山茶花の

揉み上げは黒し若さを未だ残し

親子孫みんな揃うたにらみ鯛

宝塚市

傍島静馬

二級酒のランクで気兼ねなくらし

他人事にかこつけやんわり突く急所

おみがきしたあとのお鈴が澄んでいる

ニールックコーヒーおこる羽目となり

俺よりもおしめが優先する暖炉

大阪市

不二田一三夫

歳末特集 山谷VS釜が崎

百円ライター社長が持てばキザに見え

日本も精密検査迫まられる

年きけば明治四十歳と云う

品のよいベレー帽なり古書を撰る

堺市

高橋千万子

元旦の心になって薄化粧

さざ波も荒波も好き 海育ち

紙吹雪秘密のメモの捨てどころ

くずかごに万一があり遺失品

男湯の少女まだまだ父のもの

少しずつ許して積木はくずれない

恋人といふ間の世界を信じよう

もつれ糸女が解けば美しい

良心に刺された罪に彩がない

智恵の輪が解けない謎に女棲む

竹原市

小島蘭幸

年賀状夫婦合作とは憎い

印象にないのがクラス会リードする

ひとつ積みばひとつ崩れる人生か

ほんの少しやすらぎが頂上にある

税金がかえり飲みたくなる男

島根県

藤井明朗

春 東から西から柳宴の幕あき

喜寿祝まではと執念燃えている

化粧おとして女のなき笑い

一日の時計を追うて満ち足りる

進学に就職明暗の春きびし

八尾市

高橋夕花

三カ日せめて心に白を塗る

賀状もどる とても哀しい顔をして

矢印に煩惱があり神がいる

早春の響きがするよブーツ脱ぐ

花の彩 鏡の裏に溜めていく

和歌山市

野村太茂津

八尾市

宮西弥生

勇み足駄馬の一步は寝めておく
無駄足も駿馬の歩幅は赦さない
春風に意見のせれば揺れる
屑籠に煮つめた意見捨ててある
捨て石を布いて横目に意見待つ

大阪市 河野 君子

去年の家計簿から心の糧拾う
一年の禱りを詰める重箱に
忘れられぬ男性にしている年賀状
松の内胸の火種が音を持つ
深爪の女で紅を薄く塗り

八尾市 香川 酔々

雪香に残る女の暖かみ
叫んだら男一匹負けになる
大小の風船揚げて生きている
灯の海のどこか別れた女がいる
影法師きつと和装のひとつだろう

兵庫県 遠山 可住

球筋の変化も知って妻構え
とり替えの効かない顔で笑つとく
大事なときに風邪はひくものか
キャベツが騰がればキャベツ買ったがり
美しい心を飾るものがなし

大阪市 中川 滋雀

こと無きを得た後厄に除夜の鐘

一年を皆勤賞で過ぎただけ
生かされている報恩の掌が温い
一生を棒にふるほど燃えてこず
ひよっとこの悲しいまでの裏がある

竹原市 森井 菁居

酒へ孤を捨ててセールス今日を閉ず
勝者孤独敗者も孤独うまが合う
自虐の海さがしに來たに風ぎつづく
貝にはなれず男の階段がつづく
傷ついた日から我が家の灯がぬくい

富田林市 和田 維久子

一秒の重み還らぬ刻となる
胸の傷いやす冬ばう買うて見る
一針へ母の真心こめてある
真実へ木を見て森を見ぬおろかし
きたりは時の流れの風に和す

八尾市 大路 美幸

新しい年 新しい靴で出る
少年の天を見上げる瞳が遠い
ふるさとの丘に絶叫捨ててある
赤旗の列 少年の瞳はしずか
少年の鈴はいのちの限り鳴る

寝屋川市 宮尾 あいき

なぎの海水平線から年が明け
みのりある年なれかしと屠蘇をくむ

山の宿心得顔に雪が降る
残り火のたかぶりも無し雪の宿
山の宿ゆたんぼかわりの孫と寝る

泉大津市

村上春巳

銀行のお世辞を妻は嬉しがり
豆腐一丁二人の鍋が煮えてます
どぶ池の二月は声が追っかける
鐘の音の消えるところは暮れている
かもめ舞う海は厳しい冬の貌

大阪市

江城修史

信じ切る友へ心の荷を降ろし
合鍵の温くさへ言葉選る女
ヌードショウ男はいつの日もけもの
ひとすじの願いへ燃える日のこぼし
北風に堪えても不況に堪え切れず

宇都市

平田実男

こもごもの涙で送迎会が果て
肩書きのない肩書を慕われる
親と子の対話つまらぬ事でよし
入試の子一人へ遅いおそい初春
無口の一言流れを変える

富田林市

板尾岳人

母の指だんだん細くなる峠
父ひとり鬼も一匹山の道

金剛山炭焼き小屋にある茶瓶

雪が舞う夢は白くて父の髭
雪を踏む音だよねんねと濡れている

大阪市

大坂形水

コンピューター三月危機説裏付ける
合併の名でライバルに吸収され
吸収をされる会社で禄を食み
意外ではないユーモア作家の胃潰瘍
ベルの音恐れる電話ノイローゼ

東京都

山根白星

鴉見た朝の予兆を思うまい
鬼をさえあざむく手の鳴る方の嘘
庶民とは可愛げのある団地群
堀割に浮くビニールの猟奇めく

米子市

小西雄々

口答える娘もいつか適令期
縁起よく頼まれ仲人がまた続き
銀婚式まだ嫁がない娘が二人
初恋の人も来っていた敬老会

大阪市

吉田圭井堂

手相見に喰ってかかって諭される
人生の詩は延々墓場まで
経営の神様だけが知る明日
喜寿近く斜線が目立つ人名簿

倉敷市

田垣方大

三月の山かすかにかすかに春の音

春の音雲にも色氣見つけたり
やんわりととるものはとる税吏
ハイヒール颯爽として夜に咲く

下関市 国弘 半休門

壱万円四ツに疊むケチな人
親熊に似てきて仔熊繋がる
沈むかも知れぬ日本へ明日を賭け
蟻塔を築く努力が人にな

今治市 月原 宵明

嘘多き世に観世音笑み給い
ひたむきの愛は悲しきシクラメン
木枯しに街は悲しき笛を吹き
冬を越す金魚動かず点となる

尼崎市 黒川 紫香

寒行を月冷やかに追うて来る
人生に疲れた足も出る焚火
髭とって人生丸く生きんとす
亡妻の位はいへ餅も焼いてやり

高槻市 若柳 潮花

ポーナスと風邪もいっしょに貰うて来る
肱川を埋めて流れる霧の帯
竜宮の夢を見ているさくら貝
からませた指まで嘘をついている

今治市 長野 文庫

歩いて行こう走れば息が切れるから

ライバルの席の近くで耳をたて
黒棒へ目が走るのも年のせい
コマーシャル一しずくずつ大写し

大阪市 西森 花村

本当の土をみみずはもう知らず
一番に日の丸を出す無職なり
ふる雪や止むまで国鉄待つてます
月賦でも見合写真は胸を張り

愛媛県 渡辺 曉童

くぐり戸の出入でつつがない余生
新年の御慶スラスラスラと出す
長生き競う ライバルと老い
道楽で食う むぎめしの味

大阪市 山川 阿茶

八十の手習いこれから何をしよ
赤一色 オーバー 帽子 八十の新春
ラッシュアワーも左も漫画本
献血の善意に泣いた日进行

西宮市 島居 百酒

煩惱の余韻がつづく除夜の鐘
年ごとにおせち料理がうとましく
もの真似が上手で自己を見失ない
お百度の足跡冷めたい石畳

桜井市 岩本 雀踊子

感情線ハッキリ見せて男かな

軽い咳受話器へ残した母のとし
語尾にごす女に語れぬ過去がある
大和路の風土になれて盆地呆け

鳥取市 小林 由多香

やりとげる決意巳年の険しとも
初春を孫が明るうしてくれる
試練にも耐えん師の意志継ぐ決意
家族みな働く倅せ鍋囲む

鳥取市 両川 洋々

キリストも気まぐれ新婚もう別れ
保護色に染まり切れない日をあせり
また明日も稼げと砂丘に夕陽墮つ
金の力信じて金に裏切られ

倉敷市 稲田 豊作

結納金物価を知らぬ振りで来た
脇役の心花道掃いている
針ふくむ女に紅い色が褪め
誠実一路貧しい影を曳きながら

和歌山市 津田 与史

春雨やロマン見つけた古日記
腰痛と神経痛が春を待つ
春雨やチグハグな世に音立てず
あかんでは済まぬ私は生きている

呉市 榎田 英詩

一たす一それでも一という夫婦

指輪より好きの一言信じたい
自画像に昔の苦勞皺にみる
ワイン一杯飲んで二十才が大人びる

守口市 野呂 右近

春の風吹けば柳は春の舞
からむ糸解かねば切れる計りなり
感情の外で会話の寒い日日
切れかかるきずな繕い老いの日日

岸和田市 福浦 勝晴

老けたなと妻を誹れば妻もまた
堀の水淀んでお城暮れかかり
古池を視詰めて何を考える
身投げする女へ河が奇麗すぎ

和泉市 西岡 洛醉

とまり木の椅子に女の過去と逢い
野の仏未来を静かに今日を座す
盲目の女に佗びしい陽の暮れる
人間の知恵 空間に策を練る

東大阪市 竹中 肖二

太陽を拝んで祖父は篤農家
薬屋根に芽生えた草に花が咲く
商魂をむき出しにして積む初荷
天然の楽譜奏でる竜の音

東大阪市 竹中 綾女

太陽の温み求めて部屋移る

新年の決意にぶらす雑事過多
思考力低下させてるプラモデル
日の丸を珍らしく見るお元日

米子市 八木千代
たどたどと孫も賀状が書ける春
三カ日明治の智恵が腰を据え
包みなく言える倅せ嫁と居て
代筆の賀状 次男は横に書く

松江市 柳楽鶴丸
国民と国会の常識が違い過ぎ
弱音をはけばもう一人の僕が笑う
読み切れぬ小説のような 妻
仲のよい二人に五線譜はいらぬ

東広島市 高橋鬼焼
妻だけの預金が明日へふくらんで
一年の夢を小さく妻として
雪の朝働く靴がしゃべらない
凧の舞い糸の命を信じねば

神戸市 中村ゆきを
飛鳥路をめぐって春の泥ぬぐう
海近し少年ペタル踏みながら
のんびりとするも一生やと悟り
松とれて今年も手形追ってくる

岡山市 川端柳子
運命が頭の構造少し変え

たまらなく好きで嫌いと言える人
虹の街ロマンチストの風が吹く
神仏もすて切れずして世に流れ

松江市 小林孤呂二
おおらかな日の民謡を聴いており
夜の灯がつく税務署は抄らず
千分の縮図にすれば蟻に似し
鯢の目にもう春が来ている城下町

松江市 恒松町紅
年賀状今年も来ない人がある
肩書はずして飲める君と僕
安静にしろと血圧計上り
祝日がブラウン管からやってくる

米子市 林瑞枝
愛の手を離れ冷たい風を知り
つまずかぬコースで反省のないもろさ
飛びつかねばチャンスの神に後髪が無い
解決を明日へ伸ばして夢繋ぐ

今治市 越智一水
菊焚いて菊の心にさようなら
まがつて道でふる里唄が出る
片手間でする百姓を土怒る
幸せな夢を秘めてる福寿草

和歌山市 垂井千寿子
夕焼けの色に明日を賭けてみる

一生を忍の一字に女閉じ

見て見ない振りが上手になつて姑
まっすぐの眼鏡に死角多すぎる

倉吉市 奥谷弘朗

正直に物を見ている鈍感さ

青春を国防色で染めた過去

仕事しに生れただけでは淋しいぞ

小役人句碑を残して去ると決め

島根県 堀江正朗

長生きをしてねと布団新にする

春を待つ老いの骨身に泌みる寒

ああ言つてこう言つて飲む老いの酒

合掌の背から冷えの薄れゆく

島根県 堀江芳子

平穩な初春は夫の謡から

酒ちびりちびりへ相槌きりが無い

ひよっこりと逢うた握手がまだ温い

北風へふたりで温めあう話題

大阪府 西出一栄

若水を汲んで昨日は遠い過去

川柳に惚れてよかったわが余生

オクターブ下げて老らく恋の唄

老眼鏡つるのヒヤリと今朝の冷え

富田林市 岩田美代

ちまちまと小さな倅せ彩の足袋

電球の丸さを恋うて遠い人
片隅の理性が寒いなと思ひ
荒れた手で又円周を走り出し

松江市 岡崎祥月

丸い和に灯りを入れる雛一羽

雛一羽羽ばたく新春のあたたかさ

六十路坂古稀へ一直線を引く

川柳は無限大空広い海

京都市 松川杜的

ブーツの不満内輪の娘に穿かれ

水道の若水でよし元旦の計

元日の塔には塔の顔があり

三カ日うっかり青空忘れてた

大阪府 天正千梢

文章の中に「肉声」を聞いている

バカにした宝石に急場助けられ

なだめ役に廻つてずるいとも言われ

対人的な「呼吸」つかむに妙を得て

松江市 中川晃男

過疎の村一杯に雪が埋めてくれ

生きて来た証拠に爪跡残さんか

恋知らぬままの心に皺が寄り

慰めの一つは自分へも聞かせ

平田市 久家代仕男

肝心なときの無口を齒痒がり

煩惱を珠数の重みに叱られる
胸算で見るだけにする松葉蟹
無氣力を叱り無能は口にせず

岡山県 直原 七面山

太刀打ち出来ぬ妻の勘

泣かぬ女になって寡婦

罵り合つて愛破局

馬鹿馬鹿なりの知恵で生き

神戸市 仲 どんたく

えべっさんかなわぬ時の客で混み

夜の凍てて炬燵をダッチワイフとし

止まり木に残り火たぐるベレー帽

もういくつ寝たらの頃をなつかしみ

大阪市 川 口 弘 生

冷たさが蛇いまわしいものにする

コロンブスの卵を知つて処女でない

賢婦人哲学じみた離婚する

本日休業居職夫婦の小さい旅

大阪市 有 信 新之助

派手に着て愚痴っぽい顔の皺である

カゼなんか酒で吹っ飛ぶ齡でなく

片目が入らぬだるまにも酒が要り

リラックスな服装で来いと飲み仲間

貝塚市 行 天 千 代

遠ざかる亡夫の面影追いつづけ
自惚れが裏切りの愛見抜けない
街路灯愛の終りを見とどける

島根県 錦 織 文 子

渚で拾い渚へ埋めた遠い恋

大海の広さへ小石投げたとて

そこが強み 祖国を持つており

また春か このごろ四季の近い距離

八尾市 内 海 幸 生

噓われて 汗 一瞬は考える

ソクラテスより仕合せねと妻笑う

夢買うに徹夜で並ぶとは哀し

住所録消す横線のきしみよう

大阪市 金 井 文 秋

親と子の距離が遠いと知る悲哀

ドラマの中に人生が活けてある

杖一本だけで老人らしく見え

九十万に一つの夢へ賭けるくじ

大阪市 柳 原 静 香

何気なく叩いた母の肩がやせ

星暦今年死ぬとは書いてなし

七色の過去抱きしめて老いに勝つ

老いてなおたそがれ色の虹を抱く

島根県 小 砂 白 汀

鶏頭のかなしき牛尾にあしらわれ

想う人ありやトゲ抱くバラの花
ゴキブリにこたえられない温風機
歳かくすおんな化けたいひがみたい

大田市

藤田 軒太楼

囑託でどうかと不況の波かぶる
雪づりが不仲な隣へ音をたて
強引なセールス上司は高くかい
神前にぬかずきさあて何祈る

岡山県

竹内 翁童

経営者集めて社長不況です
食卓へ春をそえよう給料日
北風に負けまいちよっぴり赤を着る
貧乏をはげます春の草萌ゆる

倉敷市

藤井 春日

患者にはカルテと違う嘘も云い
独り汲む酒から名案湧いて来る
女です車のキイにも鈴がなり
貧しさを這い上ろうとする油汗

宝塚市

小畠 無聖

慈悲のメス眼孔につき刺さり
名僧の遺囑一行の道しるべ
愛という甘い仮面の毒に馴れ
思い出を刻む形身のウオルサム

藤井寺市

児島 与呂志

老いの道たのしみ一つ減り二つ減り
案じてもくれる妻なり今日の愚痴
気ばかりが若い男の朝の悔い

美祿市

安平次 弘道

なつメロに父の青春かいま見る
仕事では見せぬ斗志でツモる牌
自分との戦い禁煙もう三日
御来迎なぜか万歳したくなり

三重県

川上 大輪

転がったエンピツ答を知っている
いくつもの嘘を重ねている孤独
決められた道で足踏みばかりする
石投げて女忘れた事にする

東大阪市

本多 清人

妻よなぜ目薬さすに口開ける
元日の午前〇時に針合わす
初仕事今年は何人嫁く社員
定退の順が十指に入っている僕

鳥取県

林 露杖

年明けて父が散華の齡超ゆ
帰省子と鍋を囲めば雪しんしん
葉牡丹の経立ち春を覗きこみ
無職欄そつと丸書くアンケート

鳥取県

鈴木 村諷子

玉砂利を踏む下駄正月の音

新首相何だい俺とおない年

養命酒俺の体のことを言う
効かずとも薬をも掴むおきぐすり
風呂場での正義感なら俺もち

大阪市 黒田 真砂

コーヒ苦くいれて心の傷洗う
年始め今年の地図を画いてみる
想い出を手繰れば浮ぶ雲いくつ
偽りの言葉が重い柵となる

松山市 谷 のぶお

草の芽よお前も冬を堪えたのか
ぐらぐらの歯に似た未練捨てきれず
表現の自由とやらをもてあまし
空高くフットボールを蹴りたい日

鳥取市 大塚 豊生

ブレイキをかけてはくれぬ世の流れ
老人の孤独を海が抱いてくれ
ものすべて初日の中に生まれ来る
銀世界春がむくむく芽吹いてる

枚方市 宮川 珠笑

鈴派手に鳴らし賽銭そっと入れ
没落の富豪が寄進碑に生きる
まだ詰まるはずと電車揺れてみせ
シャム猫のひげは鼠の味知らず

氷見市 関 美子

破れ巣を繕う知恵も冬の蜘蛛

地には命 風には情け風媒花
初恋の色をおんなは忘れない
鳥むろく滅びの場所に夕陽は不似合

西宮市 藤村 べ女

心豊に富士を仰いで朝のパン
陽炎の中に小さな春を見る
埋もれ火の愛春風に炎え上り
忍一字耐えた女の半世紀

倉敷市 野田 素身郎

負ける試合に出る子をなんと励まそう
永年勤続賞をもらう妻だから強い
やっぱり夫午前零時の千鳥足
去年もたしか今年こそはと言っていた

大阪市 河井 庸佑

二兎を追いその教訓が身にしてみる
思い切り意見が言えぬ弱味持つ
宿題に親の威厳が崩れかけ
贈り物その裏側を考える

竹原市 時 広一路

二つ目の鍵眼らせている女
本心を映す鏡を一人見る
春の水掬えば淡い夢が浮く
胸張って歩けば影に私語がない

大和郡山市 森田 カズエ

喪服試着して女ポーズとる

仕組まれたわなと女は知っている
押ピンに似た人生に甘んじる
拍手は娘夫婦と孫のこと

諫早市

原田明春

受話器から引き出したいよな女^{ひと}の声
消したり描いたり娘晴着の顔ができ
玄関の女房に酔がすうと冷め
ガム噛みながら若者の違憲論

和歌山市

沢山福水

テトラポッドで二百海里を埋めたいな
コケットの女に宴会盛り上り
どんぐりの運のよいのが生き残り
不況風破れかぶれの三昧が鳴る

岡山県

出原敬一

とおがらし草屋の軒で出番まつ
ご法話に心の皺がのびた老母
春の歌きく分校の雪だるま

今治市

原田一風

デパートの前で門松子に教え
見て呉れぬあなたに青を出し続け
年賀状生きてた友に安堵する

鳥取市

佐々木静泉

しわ寄せは気のいい所へ寄ってくる
おでん屋で互に心も温ったため
温めた土鍋で妻は出迎える

大阪市 神谷凡九郎

西宮市 若林草右

その肚が透けて見えそで閉じた口
本当は馬鹿だなどとは思もてない
ああ遂に蝮酒にもなれない人の性

京都市 都倉求芽

二百海里泳ぐ魚に地図はない
ソーラン節唄えば心にある翳り
振袖がそとわに残す砂の跡

玉野市 小谷仙山

身じろぎもせず余韻聞く除夜の鐘
カレンダー表紙のままで三が日
初雪が塔をくつきり東山

伊丹市 樫谷漫柳

茶柱を信じて朝の靴軽い
首従に振って心に借りつくる
人生観閣の鳥を詩にする

東大阪市 落合思月

無難作に一行消される住所録
倒産の額比べてる敗北者
若者に負けじカタカナの菓子を買う

和歌山市 内芝としよ

初詣で堅いこはぜへ決意する
初一念貫く夫へ靴磨く

山一つ消えてゴルフの球が飛び

東大阪市

市場 没食子

口だけの禁酒となった暮以来

戦後派よ見よ大正の地球儀を

出勤簿仕事初めの印を押し

兵庫県

大江 秋月

叩かれても犬 小屋の中で尻尾振る

神様も朝寝が出来ぬお元日

齒の痛さ知らぬか二時間待たされる

姫路市

梅谿庵 不 醉

笑顔して上司何かを頼みそう

頑固さを知らずあいつは頑固者

うす呆けを妻は何処まで知っている

唐津市

新岡 回天子

美辞麗句都会よい時悪い時

明治組などと年寄じみて言い

進歩進歩 なぜ神経痛はなおらない

羽曳野市

塩 満 敏

くじ・競馬・競輪パチンコ良いお国

ひよっとしたらと並んでたくじの列

男性歌手可愛いともてている

東大阪申

桑 原 喜 風

せめて花ホームに活けて犒らわれ

凡人の驕り鳥が嘲笑う

祈禱料値上げムードに零の数

滋賀県

溝 口 はやを

争うも和するもきかない金である

遅参して空席の座は床柱

戎さん十日過ぐれば留守らしい

鳥取県

川 崎 秋 女

牙むいた日本海と対峙する

邪心もつある日の私を海笑う

春夏秋冬海敏感な貌で来る

大阪府

西 川 誓 二

三寒四温地球は春へ歩を速め

いのちある限り法の灯を点す

擱んだ幸福へ渡る橋が無い

島根県

榊 原 秀 子

あの時をたぐり寄せたい舞扇

かつらにはまだ踏み切れぬ髪染める

横車押されて受ける妻であり

松原市

玉 置 重 人

事なかれ主義へ札束忍びより

善人の背伸びはすぐにこけかける

マイホーム先ず借金のメドがつき

兵庫県

河 原 み の る

丸腰の哀しさ十二海里さえ

姑の抵抗エプロン派手に着る

ヤレヤレと元のくらしへ松が明け

和歌山市

若宮武雄

カレンダー替えただけでも改まる

わが道を行く苦しさに妻やつれ

地藏さんのまわりは丸し冬の風

堺市

伏見茂美

のぞかせぬ心乱れた妻の涙

目で詫げる夫が少し可愛そう

我慢するか別の私に聞いてみる

米子市

増田竹馬

神棚のねずみのフンは拝まれる

寒梅にこらえるコツを教えられ

蛇のごと聡かれと聖書のたまわせ

大阪市

神夏磯道子

二十才自己中心にコマ廻る

隙のない女で女に嫌われる

倅せの温りわたしにこだまする

生駒市

草深醉升

除夜の鐘気楽に旅の宿で聞き

鰻裂く腕に釣られてあがり込み

よく出来た人だがと欠点には触れず

島根県

大森孝華

人生の余白へ詩がノックする

人生の歩幅へ耐える注射針

退院の今日へ縁起の詩ひろう

出雲市

原独仙

鍋焼きで熱燗吹雪く夜を早寝

老軀なお生へ執着灸すえる

孫が問うおねしょしたねと灸のあと

倉敷市

能登原白水

路地裏の誠意仏の貌でいる

魁けて咲く寒梅に訓えられ

べた凧の海は霞を着て眠る

鳥取県

清水一保

執念のかたまり梢の柿の色

豪雪に耐えつつ春の夢育て

御無沙汰をしましたたで済む娘が帰省

橿原市

岩井本蔭棒

次点もう誰かの頓死待つばかり

昔なら軍艦も出る二百カイリ

愛隣の宿で茶柱ひよいと立ち

大阪市

室谷徹舟

素直にはなれぬ心の不倅せ

一言が解けて膝打つ愚かさよ

熱っぽい孫抱きしめて医師の門

仙台市

川村映輝

悪人はからだで法を身につける

警察に逆えるのも民主主義

倅せな時は明日を考えぬ

笠岡市

松本忠三

犬のお産でコタツもってかれ
冬眠へ地上の騒音とどかない
ご無沙汰の帰郷へ方言が寄り

大阪市 神田 秀 峰

警察もTVに頼る解けぬ謎
咽喉に鳴る水の美味さの玉の汗
ニュースから今日のばやきを探してる

大阪市 津 守 柳 信

流さない涙無情と闘えり
あきらめの裏に無口がへばりつき
人情に泣いて根生石を割り

和歌山市 吉 野 富 子

お手伝い三味線捨てた老いの坂
初夢へ幸せ呼んでいる枕
人生に耐え振り向かずうつむかず

大阪市 藤 田 頂 留 子

十円で三つ以上の願いごと
どて焼きの焦げも値打ちの自慢味
氷点下ブーツを履いて皮を着て

大東市 土 岐 トク子

クラス会寡婦が寄せ合う年賀状
老鶯に船頭多く船 山に
かいまみる婿のぬくもり主を覚え

大阪市 横 地 雅 風

妻の客茶菓子出るまで間をつなぎ

こつこつとへそくる訳へ自問自答
すやすやと我が極楽の理容いす

京都市 山 本 規 不 風

敵意の目笑顔で返し握手する
孫の声電話で仮病を踊らせる
裏の裏読んでかかれた裏に泣き

竹原市 鈴 木 かつ子

玉ねぎを切った涙と言うは嘘
春を呼ぶ五線譜雪のとける音
北風が吹けば私の過去が舞う

大阪市 那 須 鎮 彦

打楽器へ朝のリズムが揃い出す
山焼の奈良から春がやって来る
仕事場に男のロマン育ててる

本 田 恵 二 朗

正々堂々と反則わざで勝っている
勝ったのに官軍になれぬままで老い
倅せな男年毎若返り

まきで焚く風呂もなつかし里帰り
ワッショワッショと一千万の夢祭り

正 本 水 客

(雨の山口)

塔を抱く池は旅愁の湧くところ

松膚葦 塔の五重に雨あそぶ

ザビエル聖堂出て鐘の音に包まれる

雪州の庭はしぐれて石が立つ
山頭火を慄ぶ雨降る傘ささず

川村好郎

誰よりも風邪がブレーキかけてくれ
それとなく手元を整理するも老
拝観料出して思い出偲ぶ寺
独り酌ぐちがう私になりたくて
泳いでるつもり溺れている女

菊沢小松園

本当の事を言うから憎くまれる
生きてまた今日弔電を打っておく
自らを弔う虫がすすり鳴く
道ばたに人の親切捨ててある
氣象台面目もなく晴れ上り

西尾 栗

人嫌い汐騒の詩が好き
記憶喪失したいことあり海にあり
花の命そんな言葉で逢うている
四畳半命を粗末にする話
脱稿へあと一枚のペンの音

若本多久志

六阿弥陀巡って浄土探る旅 一京・三句一
丈六の弥陀ひっそりとおわします
真如堂去來の墓の寒々と
けつまずく小石に落目覺る老い
(心光院)

ふる雪に桜田門は平和なり (1・23 上京)

伊藤茶仏

手当てする 百一歳の顔の艶
除雪費にまた泣かされる北陸路
任侠と赤城おろしじや乗り初れず
耳ざわりよいお話しはスカミたい
知恵の輪のように不況の輪がからみ

小西無鬼

子を訪えば団地サイズと云うお部屋
気短かに困った団地の洋トイレ
これからは趣味の余生と云う月日
里親へ甘えに帰るお正月
百までは二十年あると八十強気なり

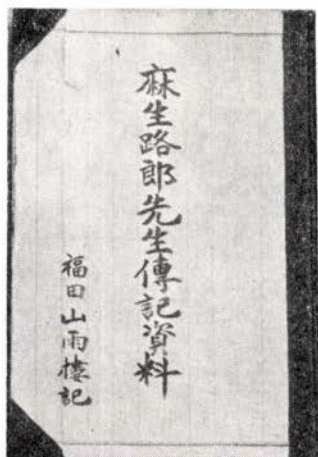
尼 緑之助

テレビの年賀で元日暮れる
穩便な正月背筋の不況感
雪十日僕も世間も冷えこんだ
茶の間のテレビひんしゅくの贈り物
雪しんしん寝酒はテレビに捕らえられ

浜田 久米雄

直らないわけを老化と考える
老化した証拠を医者に指摘され
水洩が出かかっている寒い顔
コップ酒家まで持っている意味
春を待つことしもまだ消えず

古びた一冊の帳簿「山雨楼メモ」とは、左の写真がそれである。



麻生路郎物語

—福田山雨楼メモの終結—

(27)

東 野 大 八

この麻生路郎物語も、昨日手をつけたばかりと思えば、既に第二十七回目を数えた。ともあれ、頭初予定した通り、本稿をもって筆者のタイトルである「麻生路郎物語」は終結する。路郎時点における年齢は六十五歳。麻生路郎は明治二十一年（一八八八）に生誕し、昭和四〇年（一九六五）に他界したのであるから、路郎生涯のストーリーを追うとすれば、あと十四年の晩年の春秋が残されている勘定になる。しかし、この期に拙稿を閉じる理由は、本稿を構成するに当りその重要な主軸ともなった山雨楼メモ、すなわち福田山雨楼記「麻生路郎先生伝記資料」が、昭和二十七年路郎六十五歳をもって杜絶しているからである。

また、この終稿に当たってのいま一つの理由

には、路郎門下三百余名という諸賢が、今なお柳界にあふれ、本誌上にも健吟健筆中であることだ。そのなかには中島生々庵本誌主幹をはじめ、数多の不朽洞門の高足は、師の壮年期から風雪苦楽とともにし、師を知悉することその腹背の如くで、筆者づれの遠くおよぶところではない。したがって路郎師晩年の身辺の動静については、もはや筆者が一知半解の秃筆を弄するまでもないとの考えによる。願くばこの諸賢各位の活写される本稿への補記によって、麻生路郎師晩年の歳月に有終の美を飾られんことを筆者は衷心より祈念してやまないところである。

山雨楼メモという貴重な路郎月旦の記録に對し、つねに才氣馥郁たる書簡を綴られた霞

乃夫人には、本稿を閉じるに当って心から深甚な謝意を表する次第であるが、本篇起稿に当たり寄せられた一昨年十一月の霞乃書簡を掲げよう。

「あなたに路郎のことを書いて頂くのは私年来の希望でありましたから、お心の赴くままに御筆の運びがままにおかき下さい。

内容につきましても、私達への御遠慮はさらさら御無用でございます。如何にあなたが精根こめておかき下さいましても「路郎物語」を他の人に伝える人が今仮りに十人あるといえましたら、十人が十人ともめいめいのカラーを出して語られます。芥川竜之介の作品（註）載の中、或る若い旅の夫婦が山中で追

剝きに逢い、三人とも死んで終ったのです。後程、巫女の口寄せで三人の死者に語らしめ

ところ、三人ともみんな言うことが違っていました。当人の口から直接にきいたことさえ、こんなに当たらないのです。作者は人間の告白というものには、多少嘘もある事を指摘しているのだと思います」

最後に初稿以来、このストーリーの基盤を成した「麻生路郎先生伝記資料」の作製者福田山雨楼について、筆者はここからの謝意をこめて記述しておく。

川柳雑誌 №三四（昭和30）九月号は、山雨楼追悼号にあてられている。巻頭文要約。

▼多年闘病生活を続けていられた山雨楼。福田義達氏が六月十六日午前六時四十分、横浜市保土ヶ谷区岩崎町十番地の自宅で永眠されたことはまことに痛惜に堪えない。行年五十七歳。

▼氏は明治三十一年十月一日、岡山市牟佐に生れ、その一生を鉄道人として刻苦精勵、病を得て退職。晩年国会図書館に職を奉じられたが、これまた宿阿のため退職。ひたすら療養されたが遂に起たなかった。

▼氏が川柳に手を初められたのは大正十四年一月頃で、三十余年の川柳生活においてすぐれた作家であり評論家として知られた。その柳歴と識見とにより路郎門の高足として昭和二十九年二月川柳雑誌副主幹に推され今日に及んでいる。

▼氏は死期が迫ってもなお宗教にすがろうとはしなかった。川柳による安楽死を希望し

—何負けてたまるか目に見えぬ菌と最後まで菌と闘い続けられたが、ついに菌のために敗れたのであった。

この悼文は路郎が書き、一頁を痛惜哀悼の悲痛な言葉でつづられ、路郎句帖に

片腕を千切られた思ひして焼香す
川柳 仏蒼白き月に入りししか

—オ、山雨楼と呼べは—ト筋のけぬり
—しかし奥さんという声も聞けず—

—絶筆も一糸乱れぬ君なりし—
と「山雨楼を悼む（五句）」を載せている。

この号「悼 山雨楼」の特集記事が各人の追悼記で埋められている。

その中で富士野鞍馬はこう記している。

「川柳の定義—これは誰でも欲しながら、それを言明するとなると、なかなかむずかしいのである。その難しい川柳の定義を、福田山雨楼さんは立派に論文として発表した。その論文は、岸本水府さんの「川柳の書」に採用されている。

この論文もたしか山雨楼さん病中の作と記憶する。永い病床生活のその間に、克明な調査や研究文章をいつも川柳雑誌に発表されていた。それを読むたびに俳句の正岡子規と思いつくらべて敬服していたのであった。（中略）

路郎さんが東上の時には必ず山雨楼さんを見舞っていられたことを知っている。そして川柳雑誌副主幹として期待されていたであらうに、嗚呼……。（以下略）」

山雨楼の路郎観は、一口にいえば教祖的絶対帰依の敬虔さで一貫している。「川柳研究」

昭和九年六月号の「麻生路郎論」が伝記資料に再録筆載されているが、その断片中の一、二は本稿にも再録しておいた。

また山雨楼の路郎観は、吉田水車の「山雨楼氏を偲ぶ」にもよく出ている。

「山雨楼氏と私の柳縁は二十数年にもなる。そして私の号を今の水車にしたのにも一つゆかりがある。

それは川柳雑誌社の句会へ初めて出席した折は私の名「二郎」を朗としてそのまま使っていたので、その夜何かの句が抜けて名のりの「ジロウ」と答えたが、丁度幹事に出ていられた山雨楼氏がこれを知りながら「路郎先生と同じような号を名乗るのは誰か」

と半ば叱られたような事があった。こうしたところから氏の先生をおもわれる念の厚た事がしのばれるのである。勿論、氏に改号を促されたわけでも何でもなかったが、その後自発的に今の号の水車と改めた」

昭和二十七年川柳雑誌六月号（№三〇）に「山雨楼居の二時間」と題する巻頭一頁にわたる路郎の記述がある。山雨楼の死に先だつた三年三カ月前の注目すべき一文である。長文にわたるので要点のみを抄録しよう。

「静岡の大会がすんだ翌日の五月十二日、私は静岡を発つて横浜の自宅に闘病中の山雨楼を見舞った。

べったり寝込んでいるとばかり思っていた私は、思いがけなく玄関でその姿に接したの、多少の安堵感を抱いて、奥の間の病室に

入ったがそこにはやはりベッドが設けられてあり、今の今まで床の中で私のくるのを待ちあぐんでいたのである。この部屋はその昔、私が上京した際泊めて貰った思い出の部屋である。彼は部屋に戻るなり十数年会えなかった感激が咳となってとまらない。

「まあ静かに寝ていたまえ」

と云って私が主として話すことにした。やがて咳がおさまると一冊の本を私に手渡して、「コレを持って帰って、間違っているところがあれば訂正して下さい」と云った。その一冊は古帳簿を利用したもので、表紙の中央に「麻生路郎先生伝記資料」と達筆に記し、左手の下に彼の名がある。

私はパラパラと開いてみた。扉ページには私の肖像の模写が一頁大に描かれている。それをめくると序文としてはながい文字が読まれる。

「路郎先生の伝記を編むことは一大事業である。須らく遠大な計画と周到なる用意を以てからなくてはならない。先生の足跡獅子吼はあらゆる方面に亘っているから、これを発掘し、誤りなきを期することは実に容易なことではない。この資料は山雨楼がここをこめて折にふれ、時に記録したもので先生の全貌に対しては九牛の一毛に過ぎぬが、同志と共に漸を追うて補って行きたいと思う」その次をめくると私の顔がいろいろな写真から随分沢山模写されている。大正四年頃、大阪の楽天地の地下室で剣花坊と一緒に写した時の顔、大阪日日の催しで水府君と対談した

時の私の顔まで模写されているのには愕いた。いろんな雑誌に掲載された「麻生路郎論」も根気よく蒐集されている。私の一才から数え年六十五歳までのいろいろな記事が年別に綴られてある。そして昨日の観光静岡全国川柳大会に出席したことまで記して筆を止めている。これからもまだ書き続けるということであった。そしてもう一人この仕事をやってくれる人が欲しいといった。

私が果して伝記を遺すに足る人物であるかどうかは別として、山雨楼君がこんなにも精神力を傾注して伝記資料を蒐集してしようとは私の夢想もしなかったことであるが、こうして私の伝記資料をつきつけられてみると私の勉強ぶりの不足をひしひしと感じると同時に後進に対する責任を痛感したのである。

「麻生君はいい弟子をお持ちですね」

とどっからいわれそうである。この一冊の本を山雨楼君の手からうけとった麻生路郎こそ以て冥すべしであると思った」

この「麻生路郎物語」に毎号登場した「山雨楼メモ」こそ、他ならぬ山雨楼が病む手で路郎にさし出したその伝記資料の「古びた一冊の帖簿」そのものである。筆者は、この両者が、山雨楼の病室でとり交されたその銘記すべき一瞬を脳裡に思いうかべながら、一種の名状しがたい因縁ごとと考ええを得ない。山雨楼も路郎も、この一冊の古帖簿をことある毎に開けながら、らちもない「路郎物語」をせつせと書きつづける、筆者というまききもない第三者の介在を、その時夢見た

にも考えなかったことにちがいない。病床の山雨楼に対して筆者は麻生路郎先生伝記をこんな形で活字に続けたことについて今更ながら忸怩（じくじ）たる想いにたわわれ、答えるべき言葉もない想いである。

「山雨楼さんをわしの養子に出来ないか」と川上三太郎さんが路郎にいわれたことがある。養子というのは川柳研究という柳誌でのアシスタントという意味である、と、葭乃書簡の一節にある。路郎がそれに応え、山雨楼がそれに対してどのような反応を示したかは、もとより論外の事項に属するだろう。

筆者はこの「路郎物語」の結びをかく時点において、今は亡き福田山雨楼副主幹に對し、ただ一筋に、多年の労苦による貴重な資料たる「麻生路郎先生伝記資料」を単なる「山雨楼メモ」によつて処理した冒瀆と非礼に對し、ただわけもなく叩頭九拜をくりかえし罪の意識にさいなまれる想いで心からの謝罪の言葉を贈りたい。

なお、この稿に對し、あと二回「路郎物語」の総括追補と脱落した挿話等について記してみたい。御了承願いたい。（昭51・4・29）

（昭和50年1月号から実に27回に及ぶ労作で読者を魅了してきた「麻生路郎物語」も本稿でおわりますが、あと二回、追補や挿話などがあります。―筆者のなみなみならぬご苦勞に對し心からお礼申しあげます。―編集部）

秋田実主宰 不二田一三夫編集

『漫才』

第5号 好評発売中
価三百円 送二百円

俳風柳多留廿五篇研究

—(十四丁)—



岡田甫

鈴木 黄・清
室山 三柳・八木
入江 勇・紀内
恒久・岡田 甫
博美・青木 迷朗
敬一・西原 亮

238 しつけそをぬいて禿ハとうつかれ

鈴木—「仕付芋」は、着物や蒲団のしつけ用の麻糸。遊女が馴染客にねだって新調した着物をその客の前で始めて手を通して、客に仕付を取って貰う予定にしていたのに、禿が気をきかした積りで先に仕付を抜いてしまい、こずかれているという句。

室山—賛。仕付芋は着物のしつけに用いる麻糸だから、着る直前まで抜かないのが当然である。それを禿が抜いたので、新調したものをはじめて着る気分がだいなしである。また形が崩れる心配もある。だから「どうづかれ」たのであろう。禿にすれば抜くのがおもしろかったのだらう。

入江—礎解賛。ただし場面ははっきりしないが。
清—同。禿のいたずらを詠んだだけであろう。

う。

青木—賛。しつけ糸は着物の仕立がくるわないう。い為と、仕立てた着物にくるいを生じさせない為のものであり、新調の証左ともなるのである。これを抜いた（いたずらではなく善意であろう）禿が叱られた。この着物は客にねだってせしめたもので、今後の客の金離れ如何によつては入質するかも知れぬ伏線があるので、客の前ではちよつと袖を通して、しつけ芋は取らずに置こうとしたのが遊女の腹ではなからうか。この辺の事は禿に解る筈もないからどうづかれた禿は不平顔であつたに違いない
岡田—同。

239 あふれ盃つんぼうへころんでく

鈴木—難解である。駄労解を書けば、つんば棧敷の安いお客に、高い席にいる知り合いら盃のお流れが来るという意か。

室山—どうもはっきりしない。礎稿のつんば棧敷と解しても、その位置からしてうなずけない。

西原—「つんぼう」は耳がだめであるから、酒の相手が盃をと声をかけても通じない。依つて盃をころがしてやる。そんな宴会だからあふれ盃とおもしろく表現したのではなからうか。

岡田—ボクも西原説のように考えていた。遊里でなく普通の宴会でもよろし。「あふれ盃」とは、誰かに差された盃、返盃するのに相手に分からぬ盃のことかと思う。こういうのは隣へ、また隣へと移動する。ツンボウは話や唄が聞こえず退屈するだらうから、せめて酒でもたんと呑め…ということになる。

240 うなき屋を止た咄しのおそろしさ

鈴木—江戸庶民には陰徳庇報の考え方があつ

て、「陰徳を施し善根をつみ、後生を願うべきであり、行動を慎まざれば、神仏の罰があり、種々の応報がある」と（「解釈と鑑賞」古川柳から見た江戸庶民生活・オカ一口ウ）されていた。そして、鰻は生きたまま頭をキリでとめてひきさくので、たたりを真剣に考えたのであろう、とのことだ。

うなぎ屋はむごいと云ふと腹を立
よく聞けば元来六部うなぎ売り
安五・満一

室山一賛。礎稿の例句ですに解が出来ている。こういった話は、そのころいくらでもあったのだろう。今でもよく聞くことである。落語にも鰻を放生するのがあった。

岡田一同。

241 古槐をうってあんころ餅にする

鈴木一十二月十三日煤掃の日、使い古したお椀やガラクタを古道具屋か屑屋に売って、その鳥目であんころ餅の様な暖かいものを、一同で食事代りに食べた、という句であろう。目を光らせてあんころを食っている

中入にあんころを食う十三日
安七・松二

室山一賛。『東都歳時記』にいう、煤餅である。

古槐を買へばくたおやち来ル

傍四・8

入江一賛。屑屋の一種に古槐買というのがあった。

古槐を買つても食って通る也
（生活でできること、江戸繁昌）
六五・13

大掃除の中休みに、あんころ餅を食べる。これを煤餅を祝うといった。江戸ではあんころ餅だが、愛知、鳥取では煤団子、岐阜では煤掃餅、京都丹後地方では煤雑炊、佐渡では煤掃粥をつくる。礎稿で食事代りに食べたといわれるが、もとはといえば神への供物。江戸人はすでに本来の意味を忘れ、主客転倒していた。各戸が「祭宿」となるために、この日より正月祭の忌みが始まる。そのため神棚や家の内部を清めて準備したもの。煤掃はいわばその象徴的な行事である。

岡田一同。

242 こんにやくをかまれ土こねになる

鈴木一蒟蒻屋の職人が何か悪い事をして、ここを追ひ出されたが、何と言つても足を使う多年の経験によつて、直ぐに土こねの左官職になることが出来た、という句。

ぬかるみを毎日あるく蒟蒻屋
四〇・10

蒟蒻屋桶で地だんだ踏んでいる

四五・9

室山一賛。礎稿例句三句目、主題句の焼き直

しか。

入江一同。「かまれ」は「構われ」で罪によつて追放されること。「所払い」ともいい刑の一種。

一日に十里ほどふむ蒟蒻屋

四一・12

化された身振で稼ぐ蒟蒻屋

二〇・33

岡田一同。

243 田の畔の時分ハけちなほころ也

鈴木一「ずばり九郎助稲荷を詠んだ句。『武江年表』に「今戸村百姓九郎吉が男、九郎助畑中の道に在りし稲荷社を吉原へ移す。是を九郎助稲荷といふ」とあり、また『江戸川柳辞典』には、吉原東側河岸通りにあり、なんとか化けて脱廓出来ます様にと遊女が願をかけた稲荷である、と解説している。

九良介へ化て出たひの願ばかり

拾六・14

黒助のわきで男に化けて居る

一八・17

室山一賛。九郎助稲荷の歴史的解説句。

黒助ハいなり仲間のいろおとこ

宝一三・礼五

入江一葛西領半田稲荷か。畔を二分すると、「半田」になる。

岡田一同の畔（くろ）で九郎助を暗示した作。

いのちもいらぬ 名もいらぬ

戸田古方

本年は一九七七年、一八七七年、明治十年から数えて百年目になります。つまり、西郷隆盛の百年祭。気の早い向きは、もうポスターなどちらつかせています。

西郷さんといえば、ツンツルテンの着物に三尺帯、犬を連れて寛永寺の鳩の糞を頭から浴びて平然としている姿を思い浮かべます。鹿児島へ行くと、見晴らしのよい高台の西郷さんの墓に近く、陸軍大将の正装をした西郷さんが、矢張りギョロリと眼を光らせて立っていたのを思い出します。どっちの西郷さんが本当の西郷さんかなと思うのです。

司馬遼太郎氏が「翔ぶが如く」という本を書き続けていられます。最近第六巻が出ました。西郷さんの話も進んで、西南戦争の幕開きから、田原坂当りまでが書かれています。私は西南戦争を読むのが好きなのです。どこが好きか、何故好きかと申しますと、これ程ロマンに富んだ戦争は外にありません。殊に西郷方です。智将も大勢いるだろうに、驚く程戦略も戦術も考えていないのです。それは総大将の西郷さんに一番多く見られます。戦

役八ヵ月の間、西郷さんは全く上野の銅像そっくり、超タロボット。西郷さん程の人物、何も彼もよく分つていながら、明治維新に順応出来ない人々と一緒に死んでやろうというのでしよう。そこに、西郷さんの悲劇があり悲壮感があるのです。判官びいきの日本人が喝采するのです。

「子孫のために美田を買わず」といい、また「いのちもいらぬ、名もいらぬ人ならでは」と、いつているのが西郷さんです。若い日、月照と薩摩湯で心中したのもその現れでしょうが、この西南戦争程西郷さんの西郷さんらしい場面はないでしょう。

扱、話は変わりますが、秋になると、各地に川柳大会が催されます、応接に暇がない程です。川柳大会というと、私は路郎先生を必ず思い出します。その頃は大阪市文化祭協賛市民川柳大会ですが、各社合同の相談会によく出席したものでした。すむと、路郎先生の所へ報告に参りました。そして、いつも無事には済まないのです。

「一休何をしてんねんや。これなら、各社

の月例会の合同やないか。税金を使って催す市民川柳大会の名が泣くぞ。」と叱られました。

私事を申して恐縮ですが、六年前から少し暇が出来、依頼されるままに豊中市教育委員会や公民館の川柳講座をさせて頂き、その都度、数人及至十数名ずつ新人を得ることが出来ました。まだ、まだですが、豊中川柳会は夜の集りの外に、木曜会とい昼の会をもっておりま。そのメンバーは婦人か老人で、豊中市民なのです。どこまで行けるかは存じませんが、先生へのよいお土産になればと決意しております。

路郎先生はそういう考えを持っていられたので、定例の川柳大会はなさいませんでした私の入門以前に、川柳社会化のため、朝日会館を使つて大規模の大会を開かれた話はよく承りました。紀元二千六百年に、三越のホールで催された時には、舞台上で、川柳句会をやつて会衆に見せたことがございました。当、川柳塔社も定例大会をいたしております。

路郎先生の御一生はそれこそ、なり振構われない奮闘であり、川柳社会化への挺身でありました。

路郎先生は本名幸二郎、麻生幸二郎は姓名学からいうと弱いのだそうですが、麻生路郎となると、俄然とても強くなれるとのこと私の接した先生は、一歩も妥協を許されない強い方でした。その強さといったら、時には全く損得を超越し「いのちも名もいらぬ」に

までなりかねませんでした。その先生の一番大きな遺訓と頂いているのが

「川柳は人間陶冶の詩」

本年は先生の十三回忌。先生のお顔を知らない方々も殖えました。「人間陶冶」の理解にも疑問がもたれているようなので、私は誌上に「人間陶冶の展開と実践」を連載させて頂きました。まだ展開を終ったばかりですが、この展開の仕方は、先生から直接伺ったものでなく、私見に基ずく独断も多々交っていると思ひます。不日、実践を続載。今その準備中。引用句の出典は「旅人」「福寿草」「私達」「同人句集川柳塔」と決めております。

さて、展開における私見の概要を整理いたしますと、私の着目した川柳の特徴は、その客観性であります。つまり、先生のいわゆる人生批判の極は自己批判。それを徹底させたところにあるものは自性の悪さであります。真面目に胡麻化さずに突き進めば、絶望にも至りましょうし、自己嫌悪です。その時川柳はおそらく折返し点をみつけさせてくれ、方向転換させて呉るでしょう。即ち、世の中の姿の真相に出合えるのです。あらゆるいのちの存在が見え出し、そのいのちが私にギブして呉っているのだと分つてきます。私からいうならテイク。その恵みのテイク、借財を背負っぱなしにしているのが自分の姿であった。人間らしい良識は、このテイクをカバーするために他に対するギフの積み重ねより外はないと気付くでしょう。及ばすとも、全力

をそれに差し向ける。せずつておられぬ、せめてはせめてはとなつてくるのです。これは正に「いのちもいらぬ名もいらぬ」心へのこの醜いものが昇華したときです。エゴという第一の否定を川柳によつてもう一度否定されることでゆるぎない心になつて来たのです。これこそ川柳の絶対境、人間陶冶の完成です。私は先生の「人間陶冶」はこのことをいつておられると解し得るようになりました。私に於て、川柳は宗教にまで達しているのだから裏をつけることさえできないのです。

鈴木敏也先生

(川柳)と私

石 崎 柳 石

恩師鈴木敏也先生の多数の著述の中、「芸論抄、廢園雜草」誌の中に、四、断想四片、として二「史実伝説に因める古川柳」あり。今これを紹介する。かつて広島川柳五十周年の記念句会の折、発表したるものでもある。先生は、名古屋の生れ、東大より四高を経て、広島高師に移られ、後広島文理科大学国語文科の主任、次いで学長代理をもつとめられて病没。哀悼に堪えず、謹みて御冥福を祈り奉る。名古屋の市橋鐸氏はお兄さんと承る。この方に「川柳新釈」「俳人丈艸」「俳

句新釈」の著書ありと。名著述である由。

閑話休題、「古川柳の一方面に、簡単な注解でもと思つて筆をとる。(中略)川柳点の狂句を説明する前に前句付に就いて一言せねばならない。……民間には極めてのんきな、世の中を三分五厘に見て暮す、洒脱な寛潤ぶりを以つて、凡てを茶化してかかると云う氣風が流行した。この氣運に乗じて現われたもの一に「雜俳」がある。「雜俳」とは名の示すように、いろいろの形式を持つた遊戯的な俳諧であるが、そのうち最も勢力のあつたのが前句付である。(中略)この前句付は俳句のように「季」とか「切字」と云う制約もなく、ただ文字の数さえ合えばよいのであるし、云うところも、極めて通俗な世態人事をそのままに詠めばいいから、誰にでも作られる。それで早く元禄以前から京阪や近江あたりでは行われていたのである。……其角の主張した江戸座の俳諧は通俗的な一面と、江戸の氣風に合致する一面を保有して居た。この風尚が滑稽洒落な情趣を助長したと云つてよい。そのうちに、此種の俳諧をも面倒なものと見て、更に作り易い前句付の方向に一般の心は向けられた。それがまた前句付をも小厄介なものとして、遂には付句だけを独立させて了つた。この風が隆盛を來したのは恰度享保以後の事で、「川柳点の狂句」と云われるのはこれである。即ち川柳はかくして起つたのである。(中略)

さて、川柳は滑稽的な民衆芸だと云われている。しかし、唯、暢氣千萬な大平の逸民

が暇つぶしの云草ばかりではない。寸鉄人を刺すと云わうか、人情の機微を解されると申さうか、山椒も小粒でピリリと辛い、つんと利いて、感激の随喜の涙が出る。この点に於いたら、同じ時代の産物たる狂詩や狂歌に比べて、数段高い芸術的位置を保つてゐると云わねばならぬ。……川柳には当代民衆の生活そのものが滲み出してゐる。決して風俗習慣と云うような外面的な表現のみではない。いつの世にも変らぬ人情の閃めきと人間性の赤裸々な表象とが、まさまじと窺われる。一方に於て社会詩風俗詩の面影があると共に、他方には人生に對する辛辣な諷刺と皮肉とが、把羅剔抉を恣にして、読む人をして凜然として襟を正さしめ、慄然として畏懼せしめ、また哄然として失笑せしめる。ここに川柳の面白味も、存在の意義もある。

こう見て来ると、川柳は先ず第一に人情の方面の社会風俗詩を取出して攻究せねばならぬ。……『塵塚談』に曰く『俳諧に六玉川、前句付に柳樽と云ふ草紙あり。人の挙動、心のよしあし、尊卑の人情、上下の人心の有様、その外、世の中の事情をざれ句に云へるものなり。されど謎に似たる事ありて、早速に解し難き事多くあり。奉行頭人は人の邪正、事変、人情を辨知する事専務なれば、此草紙の句どもすらと解する人をよしとする』；教育者の如きも更に人情を解してゐてはならない。

そこで遺憾ならまず川柳の中心階級たる、居候下女諸君はしばらく措き、比較的穩

やか——中には少々危険性もあるが——史実或は伝説から取材した句に對して略解を加え消閑の具に供したいと思う。

今、柳樽の第二篇から順次に句を拾つてゆく。(初篇は、先年沼波瓊次氏が注釈本を出しているから略す。)

その例句中から挙げてみると、

○大平記もとが女の口ひとつ

北條氏覆滅の企討に参与した者の中に土岐頼員と云うのが居た。いよいよ事を挙げる前夜その妻に告げた。妻は六波羅奉行齊藤利行の女であつた。女は早速六波羅に密告した。

○かくして事は急転直下し、後基賢朝の死となり、笠置合戦となり「大平記」の序幕は切つて落されたのである。

○京だんとどきあで九年いちり合ひ

「だん」は京言葉、「どき」は東北言葉である。奥州の豪族安倍頼時及びその子、貞任宗任は、官軍の將源頼義に、その子義家と九年間応戦した。所謂前九年の役で、それを柳化したのが此句である。

○石山につくねんとした美しき

紫式部が源氏物語を石山寺で書いたと云う俗説。文机に凭れかかつて腹案を練つてゐる式部を、その姿つくねんと形容したのである

○通盛は寝まきの上へ鎧を着

と云う「柳樽」初篇にある句について、一言言いたい。沼波さんは此の句を養和元年九月加賀境で稲津実澄に不意討を喰つた時の通盛のように説いていられる。私はそれは解したくない。これは謡曲通盛から取つたものだ。

一谷の戦の前夜、通盛が小宰相局と名残を惜しむ、夜も白々とあけはなれる。「舍弟能登守、早や甲冑をよそひつつ通盛は何に來ぬぞ、など近なはれ給うぞ」と、呼ばはりたる其の聲に驚いて通盛が、あはて、寝まきの上に鎧を着ると、川柳一流の觀察を以てしたものと思う。

次に支那種の一部について述べよう。

○懲りてはて、函谷関に時計でき

(孟嘗君の故事)

○此奴だと孔子を後手練り

(孔子と揚虎(盗人)とはよく似ていたから)

○葉とり始皇待てど暮らせども

(除福不死の葉を求めて帰らず)

秦ノ始皇帝は血税にて万里の長城や大運河を作りおろすことはご承知。二世は馬鹿にされて失笑もの。詳しくは筆者の執筆、川柳「ひろしま」誌上にてご参照下さい。題して「馬鹿放」にする拙稿連続です。

因みに恩師、この一文を結んで曰く、

「：重ねて云うまでもなく此の句種は実は川柳中の傍流をなすもので、本流は云うまでもなく、川柳の佳句、創始時代即ち柄井八衛門が中心をなした明和安永の頃にある。それが天明寛政となり、更に降つて文化文政となると漸次に低下して、古句の焼直しや、露骨な猥雑なものが次第に多くなつた。だから川柳はやはり「柳樽」三十篇位までで沢山のよう思う」と。(大正十四・八「学校教育」)に記載してある。

—同人吟—

秀句鑑賞

—前月号から—

菊 沢 小松園

二百カイリ魚の知ったことでなし

安平次弘道

海洋問題も世界の大勢は二百カイリに漸く落ち附くようになって我が国もやっと方針が決つたらしい。然し人間が勝手に決めたことで、其処から海の色が變つてる訳でもなく又境界があるのでも無い、地図の上に線を引いただけ素より泳いでいる魚たちの知ったことか。川柳家の眼は飽くまで真実を見詰めている。

ボルノ向きの漢字もいろいろあるものだ

有信新之助

日本人は母国語の使い方があまり器用な方でないといふ国文学者が書いて居た。だんだん文明と文化の違い、肉体と肉感との違い、凝脂と艶脂との違いの判らない人達も増えて来るようである。近頃矢鱈にカタカナの多い語呂の悪い創作が増えて来ている。酒池肉林の

果てを現わす漢字もまた多彩である。その昔の先進国の徽州の賜というべきであろう。バラ色でない人世は口にせず

若柳 潮花

斯うはつきり言い切れるところにこの人の倅せをおもひ、明るく人世観がある。暗い面に眼を閉じて通れる人は幸福である。バラ色も灰色も要は心の受け取り方で、纖手よく観客を魅了した往年の、人生も差す手引く手の華やかさという処か！

札束の夢善人に抱かれたい

嘉数千代香

手の切れる札束パツパツとつかい、善人はそれは奇麗にさっぱりとはよう遣わぬ、汗の代償のお金は芝居などでもやっぱり大抵の場合よれよれのが多く決して札束という代物では無さそうである。皮肉な現世では札束なるものは善人には夢でしかあり得ないのか、痛烈な一句であり耳がいたい。

鬼になる言葉の端をやわらげる

岩本雀踊子

鬼心といひ仏心と言うも紙一重の人間の弱さを、心裡描写がよく出ている。わざとらしさがなくて好い。句の下五に句の重点を置いた重要さをこの句はよく教えて呉れている。人間のある日の一断面を突いていま

譲り合う席は小さくあいたまま

若林 草右

市井の一鎖事もよく句の材として生かせる好例の一句、そしてこの句の生命は中の小さく空にある。小さくなったのである、譲り

合っている間にある。古い時代の人と新しい感覚の鋭さのギャップが冷たく浮彫にされているのが印象に残る。

再婚を子も賛成をする育ち

山根 白星

テレビの場面にも先日斯う言ったことがあった。親の心使いと違った意味で子も成長しているのである。目出度しめでたしの場面である。それも迂余曲折の果であることは勿論である。

愛終る小さな午後

関 美子

劇しい恋愛の最後が割合にあつさりした儘におさらばになることもある。仮りその世の仮りの姿の現れと見れば何の小さな一例に過ぎないけれど、当事者に執つては一生涯忘れ得ないその時の印象やちよつとした言葉の端々までもいくら齡を取つても忘れることが出来ないものである。冴え返える思い出というものである。下五の扱い方に余裕のあるのが切めて救いと言ふべきか。

大金を失うおそれなき暮らし

高杉 鬼遊

倅せは必ず金のみでない肯定していても情報過多の社会、夜盗に何十万の現金をやられたとか、人に詐されて何百万も持ち去られたと聞くと人事ながら縁のない話に洩息も出るのが庶民の実状で必々一度そんな目に会って見たかと思うのも無理もない。盗まれた人の不幸を案ずる前に羨ましさも催すのも妙なものでそれから後のその家の様子も判らぬままに徒らに生活の圈を内省させられてい

水煙抄

川村好郎選

和歌山市 西山 幸

寝屋川市 福富隆子

併せ呑む寛さを海は誇らない
木枯しへシグナルだけが胸を張る
妥協する音は知らない計算器
樟脳の匂いにひそむ古い罪
傍観者になりきっている置時計

東大阪市 崎山美子

東予市 小山悠泉

我が余暇は屋根いつばいの菊の鉢
軒先に羽根をよせあう鳩が二羽
税務署へしぼられに行く重い足
丹前で除夜の鐘待つ酒の味
脱サラの覚悟を妻にはげまされ

北九州市 三上春雄

三重県 川上富子

襷にも帯にもならず年を取り
公定歩合露地には縁のない数字
通信簿博士に遠い字が並び
寝ていても起きてても果報はそっぽ向き
不況風あくびの好きな人にさせ

夫いつか千手観音を要求す
左手をかばう手袋穴だらけ
広告の嘘につられて来て買わず
お煮は父方 雑煮は母方で
妥協する父の白髪が哀れとも
カド番に立った力士に似たピンチ
抱き上げる孫へ青空澄み渡り
吹き抜ける風にも初春の詩がある
智恵の輪が外れぬ夫婦なお無口
和解するための仮面を用意する
うなずいたものの背中が迷うてる
女とは悲し妥協を強いられる
釘を打つ時は男にしてくれる
八人目の敵は己れの自尊心

大阪市 文川野生

幻を洋酒グラスの中に見た
もう泣かぬ女真珠を貯めている

富田林市 中村 優

大都会捨てたる余生の夢があり
密室にドラマを詰める大都会
封筒の厚みに心盜まれる

岡山県 池田 半仙

賽銭をはずみ子のこと孫の事
自我通す女 魅力が消えている
決断を迫る女房の声他人

松江市 本庄 快哉

地球儀の赤は日本とだけ決めた
親友と言われ利用をされている
だまされる判とは知らぬ息をかけ

松江市 梅本 登美也

レモンテールまるく断る言葉撰る
安来節下手でどじょうがみんな逃げ
売り切つて孫の靴買う背負いかご

大阪市 野田 君枝

古くとも夫唱婦随はいい姿
神経痛出たとも書けず年賀状
魅力ちと足りぬと言えば塗つて来る

大阪市 内藤 ますえ

たすきがけ婦人の姿になつてゐる
新人の度胸ほめたりけなしたり

茶柱に騙されつづけて日がくれる

橋本市 田中 恒治

孫の守り守りする孫に手を引かれ
旅カバン軽きも楽しバス旅行
食い初め赤い茶碗に夢がある

枚方市 水野 弘

もう駄目か期待の昇竜已につなぎ
釣り運を占う初釣りつつがなし
ブーツ流行たまには見度い脚線美

東広島市 石井 さわ子

幸福を絵にしたような老夫婦
旅の宿朝餉の汁に妻を恋う
又来ると母子手を振り新幹線

新宮市 西尾 功

マージャンの音が聞こえている師走
妻と娘が予算で攻める十二月
まずいとも云えず胃痛のせいにする

和歌山市 樫村 ふみよ

ひがませて置いてひがむなどと言ひ
たましいを洗う涙がふとこぼれ
ざあますのおつき合ひではない気楽

宝塚市 吉田 笑女

孫去んで急に身に沁むすき間風
年始客とだえて母の寝正月
水割りでダウン我が家の年男

春告げに挨拶庭の路のとう

お愛想を言えはお愛想が戻り

円満という人覇気喪失症のよう

寒さ堪うささん花好き不遇の人

笑顔にも作意を見抜く隙ない目

生活がかかっているから怒りとめ

春の宵柱時計がまた止まり

失意の日夕陽の海へ抱れたく

春霞倅せこぼしそうに見え

心の灯を辿れば亡父の鞭に逢い

写して笑顔を底を知る鏡

逆境へ近くの他人が智慧を呉れ

十字架の重さか妻の背の丸み

旅好きな人の遺品に箸袋

関節が錆びつく程の寝正月

チンパンジーの孤独な癖は偷まれる

あけがたの街灯の火は昨日の火

見たくない映画に誘っている男

羽咋市 三宅ろ亭

岡山市 井上柳五郎

倉敷市 松井春風

和歌山市 松原寿子

羽曳野市 麻野幽玄

和歌山市 桑原道夫

寝屋川市 柴田恵美子

青春の驕りゆるさぬペンがある
感情の起伏へ悟り遠くいる

誠実も売るので足にマメが出来

聴えない孤独を充たす屠蘇の酔い

筆談に慣れても忙しさつきまとい

キッチンも乾いて今日はお正月

カンフルの役目も持って友の文

ふり捨てることのみ多く女坂

革新の女で花のない枝木

茶粥温し人の生活は羨やまず

テレビ見て独り泣き初め笑い初め

おなじこと聞かされ石になっておく

古方先生御入院

うろたえて師の病室が見つからず

他愛ないゲームでもめた三カ日

ふるさとが違い雑煮で夫婦もめ

栄転の噂ちらほら春となり

肖像があくびしている会議室

停年近くやつと動いた椅子である

松原市 北野久子

愛媛県 宮尾みのり

唐津市 岩下照沖

豊中市 安藤寿美子

八尾市 小川洋子

島根県 松本文子

菊生けて今日一日の涙消す
ふるさとの匂いが届く銀世界
落葉樹私は誰の為に枯れ

青森県 荒田 つる

忘年会今年の恥のかき納め
男下駄備えて一人住むわびし
大吉に土産奮発して帰り

尼崎市 中谷 利美

照れくさく妻の年賀へ改り
酒飲むにもう女気はいらぬ齡
蒔いた種蒔るに卑法な神頼み

吹田市 藤原 世史春

長船の名刀ソ連のどこで錆び
外灯を雨が哀しい顔に見せ
こんなにも赤くなつたと蟹が恥じ

尾鷲市 渡辺 伊津志

乾杯のグラスに涙写す人
緩急の呼吸教える初日の出

大阪市 小谷 清女

喧嘩など見せぬ夫婦で勝気なり
切れかかる我慢の糸をきつくしめ

唐津市 田口 虹汀

燃えましよう今日が最後の銀座なら
達人の姿柳の身のこなし

唐津市 松垣 岩光

たのもしき妻なり特価品売場
ウインドは一足先に春を着る

大和高田市 岸本 豊平次

振り向けばチャンス逃した過去が見え
次ぎ次ぎに予定が変る寒い朝

大阪市 文川 一念

踏んで見ろ妻はいっそう強く生く
震源地妻の口から揺れ初め

島根県 安達 潮音

一九七六年合掌と書き日記とじ
思い出遠く汚れた海に貝もない

岡山市 船越 汽水

貝閉じて愛の雫に飢えている
捨てられた猫は拾われようとする

豊中市 田中 善四郎

碁の友よ戦うまでは平和なり
ささやかな幸せながら喜寿迎え

大和郡山市 今谷 紫園

足袋かえてひとさし舞うも松の内
合吟のひとりは酔うたままの声

橋本市 森脇 善彦

街ぶらの行き着く先は人恋し
光陰の矢も折る恋の気ままぶり

山口県 高崎 雀声

前かけをはずし一日終わる母

一人もの鍵穴だけが待っている

大阪市 欄 蘭

口ほどに動かず炬燵の中に居る

縁日の香具師の話術に聞き惚れる

姫路市 大原 葉 香

夕焼が恋しい今日も雪に暮れ
とんど祭餅もするめも丸く焼け
死ぬほどの恋でなくても懐かしく
公務員になれと豚児にハッパかけ

出雲市 石倉 英佐子
八戸市 島田 昭治

縄のれん男野心をさぐり合い
悔いのない一日首まで湯に浸る

羽曳野市 岩橋 双虎

再婚の話ジョークへ蓋をする
倦怠期救う切符を二枚くれ

今治市 薦本 昌道

冗談のように口説いて見るも年
突き当りかけて師走の街は暮れ

寝屋川市 江口 度

領海と言う線など知らぬ波
二日酔いちよっぴり残し初出勤

岡山県 長尾 保

赤茶けた屋根沿線の人の肺
一隅の晴れ間へ希望つなぎとめ

尼崎市 大垣 たもつ

矢印の通り歩かぬ自立心
祖母の智恵小児科にない処方箋

高知市 瀬戸 海州

値切る時大阪弁になっていた
大将と呼ばれ市場籠に馴れ

鳥取市 勝山 紫宏

手袋の片手になって見捨てられ
お茶漬でさらさら屠蘇の胃を洗い

大阪市 平井 露芳

真直に見つめる瞳信じてる
大雪の下でも土は春育て

岸和田市 池田 露子

滑稽に見ていたブーツを重宝し
うぬばれと気付いた木の葉の船の上

八尾市 田中 紀美代

おつくうな義理を済ませてきた喪服
板塀を越えた隣の柿をもぐ

岸和田市 池田 香珠夫

待ち人は来らず鳩と戯れる

煎薬の香にむせ返える老いの城

五十路の春着焦りの彩を選る
老醜の嘆きを捨てる海がない

滋賀県 柚木 踏草

西宮市 杉浦 婦美子

パーティの鍔の柄を選ぶ淑女
がたんと念押してゆく赤字線

大阪市 中辻千子

戦後派へ国旗の色も褪せている
祝箸今年は孫の分も増え

新潟県 高野不二

警察が叱られている投書欄
冷凍魚ませて客呼ぶ海の宿

橿原市 西本保夫

平社員と言うのんきさを噛みしめる
長いものに巻かれて来た定年

羽島市 伊藤静枝

針の糸通す手許に老を知る
堅い芽のほころびを待ち着ぶくれる

兵庫県 高橋近江

金槌が日曜大工の手をたたき
晩酌が目刺しでまわるうれしい日

大阪市 新川貞祐

大浜に明治を残す木の燈台
顔見世の梵天白く冴える暮

諫早市 江副二牛

糟糠の妻を味方に失意の日
定年に師走の街はまぶしすぎ

鳥取県 金川満春

顧みて六十路の坂は長かりき

老妻の甘え年甲斐忘れさせ

岡山市 時末一灯

背かれて私に白夜がまだ続く
倅せをつめた日風船逃げて行き

七尾市 松高秀峰

副作用言っておれない薬飲む
厄年の息子の分も初詣

青森県 波 ただお

茅屋の追憶楽し四季の詩
ネクタイの柄より売り娘よくて買い

富田林市 奥井春子

孫よりの賀状一枚温み添え
過去を呼ぶ捨てかねるもの多し

松江市 岡崎雪美

目出度い日恥しいほど泣けてくる
苦労坂越しても越してもつづく坂

今治市 渡辺南率

ストーブを点火歯車回り出す
マンネリの打破左遷にも甘んじる

高松市 溝渕美紀子

雪の中地蔵は笑顔で立ち尽くす
無言でも受話器の向こうに居るあなた

今治市 園部正則

雪降れば新幹線もただの汽車
表札の末尾に明治ひとそと生き

おふくろの味も機械で造られる
共稼ぎ男沽券にこたわれず

貯金出し女の意地を張って見る
故里の甘い囁き母の味

血と汗のドラマに挑む君と僕

校門が幼き頃を語りかけ

断った筈の煙草蔭で吸っており

無駄な日でなかった昨日今日の糧

新年もない待合の患者の顔

カラフルな葉をのんで生きている

初春に何は無くとも青い空

口下手の相手も話題もてあまし

そこぬけに明るい声をくれた母

尼崎市 中塚喜甲

尼崎市 駒村岳麓

松江市 黒目大鳥

出雲市 板垣夢酔

泉佐野市 大工静子

島根県 飯塚虎秋

堺市 堀畑日々子

大阪市 堀口欣一

今治市 古野伶人

鳥取市 岸本無人

島根県 岩田三和

岡山県 柳原孝柳

子供にも一円玉は見放なされ

深々と下げる頭に物言わせ

流れ星思案に余る夜を切る

忙がしく暮れて倅せかも知れず

孫の成人式

まっすぐに伸びた竹の子根を強く

正月をローマに遊ぶ

スパゲティ食べて異国で年を越し

寒風の露天に立ち売る少女の手

綱引きへかけ声だけののも混じり

古きもの捨てよと除夜の鐘が鳴り

物欲の権化となりて歳の市

嘘つきの上手が赤ジュウタンを踏む

まずしくも人情豊かなお人柄

亀岡市 森和堂

東大阪市 西条文子

鳥取県 加藤茶人

尼崎市 小林文月

ロンドン 佐々木朝代

唐津市 桑原掬治

唐津市 田中紫浪

唐津市 山下勝一

唐津市 岩崎實

唐津市 三浦ひろ坊

出雲市 高見鐘堂

気分転換寢室から派手になり

☆

寝屋川市 小林 鯛牙子

妻が居る守備で我が家にあるゆとり

シャボテンの棘ブライドは捨て給え

靴磨きにも詩があり世に飢えず

鳥歌う雪よりぬけし山の息

大洲市 米澤 天明

口喧嘩心の中で妻に詫び

腹立ててやっぱり損を繰返し

雨もよし蛇の目を久しぶりに見る

寝ない児へウィークエンダー観そこない

ワイドショウ何を観たのか妻変り

朝飯を食べ食べスタジオー二

岐阜市 市川 鱗魚

山田 季賛一周忌法要大会

遺句集「鉄道草」発刊記念大会

日時 6月19日(日) 10時開門

場所 竹原市照蓮寺(駅より徒歩30分) 国重文・日本百庭園の小祇園在り。

兼題 勲章・男盛り・メモ・新幹線・ひと

出句 13時締切。各題二句。

献句 一句。席題なし(投句拝辞)

開會 16時

会費 千円(遺句集B6版一九二ページ。

御齊(おとき)発表誌等ふくむ)

当日の予定 安芸の小京都観光・希望者無料

法要13時〜14時 披露14時〜16時。

連絡先 〒725 竹原市竹原町田中 山内静水

雅号ぶつちやけ話 (158)

ほんいんぼう



岩井本蔭棒

三十代の私は囲碁に明け暮れた時代でその頃職場の機関紙の随筆などにペンネームとして使ったのが始まりで、後に川柳に入門した時何の抵抗もなく雅号に使ったのがそのまま現在に至りました。当時の囲碁界の高士高川秀格本因坊のファンであった私は不遜ながらそのホンインボウを無断拝借して本蔭棒とモジったわけですが、よく句会などで記名氏から「字画が多くて手間がかかって仕方ない」などとボヤかれたりしましたし、入選句の多い時など身のすくむ思いでした。こんなことならもっと簡単なのにすれば良かったと悔んだ事も幾度ありましたが、遂に改号の決心もつかぬまま今日に至っている次第です。

(地方公務員・五二歳)

PRの欄

「川柳に笑いとユーモアをたっぷりとの運動展開中です。

ありのまま書いたら母ちゃんしうい顔

ど根性松の木ほどに曲らない

潮時のわからぬ雑魚が捕えられ

禁酒して腹の底まで冬になり 俊風

(伊丹市・ゆうもあ川柳会)

東京都 池口 吞歩

い
わ
い

「旅人」以後の

麻生路郎作品

(38)

三十八年九月号

不朽洞句帖

老衰で死んだそうな
誰も何も云わない

毒素がどうあろうと
芸術の怒り

スピード化を軽蔑しながら
都心に生きる

水泳日本がややしくなった
魚という魚みな泳ぐ

白桃をめでてるうちに残暑が来

愛二居を辞して

稲の青が

帰途のわたしを淋みしうす

ヘロン旅客機遭難

泣け遺族 天候はいたずらものだった

南海電鉄川柳会「払い戻し」

延着の払い戻しで喫茶に居

三十八年十月号

不朽洞句帖

蜘蛛の糸でも

妻はわたしにすがりつく

凡人と自称小さな諦らめか

二三吉のレコードで

二本ばかり飲み

市長さんの眼にも触れない長屋に居
せてパトロンにでもとおじいちゃんが志願
この恋もフォアボールに終りたり

窓口談義、引用句

正直が何んのたしにもならず死に
幸福は金庫の中になかりけり

南海電鉄川柳会「安全」

安全のぎりぎりまでが若さにて

三十八年十一月号

不朽洞句帖

樹の高さまで

登りきつても知れたもの

保釈中だが

麻葉売るより策がなく

奥さんになやまされ

まだ重役室に居る

新聞少年が持つて来た 寒さ

代議士は虚勢を張るにいつか馴れ

われ等陣笠とは 思わずに生き

時差出勤彼の女への思いそのまんま

南海電鉄川柳会「ナイター」

ナイターということにして会いましょう



川柳塔六百号記念

麻生路郎先生の不朽の名著

「旅人」とその後の作品を収録してここに再現しました。(普及版)

52年5月8日発売 頒価千円(送料共)

編集スタッフ—橘高薫風・谷垣史好・高杉鬼遊

・香川酔々・板尾岳人・不二田一三夫

華道関西未生流家元

籠島 総甫

教室 西宮市北口町七ノ九

電話 六七一六三三六

教室 尼崎市武庫庄浅堀

一五七一八

教室 尼崎市武庫之荘三丁目

電話(06)四三二一四五〇

一五一三

武庫之荘文化会

電話(06)四三一〇七三

(傍 島 静 馬)

愛染帖

正本水客選

和歌山市

桑原 道夫

冬のベンチ人が通ると人を見る
日暮とき本屋へ入るぜいたくさ

島根県

錦織 文子

後めく事あり香水をきつくふる
女炎える白エブロンが憎らしく

西宮市

藤村 ベ女

陽炎の中に若さが揺れている
父の影 忽然と消え春寒し

枚方市

富川 珠笑

裸木が悟りきつてる貌で立つ
みかん食う夫婦のひさを猫が選る

富田林市

岩田 美代

冬の夜にけむりの汽車を描いてみる
冬帽子親しみやすい髭がある

和歌山市

西山 幸

受話器置く手が裏切りを許さない
得るものも喪うものも冬の色

東京都

山根 白星

業削や卒塔婆の墨の垂れたまま
陽がさした雲のあい間の神話めく

和歌山市

津田 与史

ドン底に落ちた男の寒い酒

夕焼へ枯木燃え出すかも知れぬ

高槻市

若柳 潮花

石組の影少しずつ月動く
初めての春にまごつく梅の花

貝塚市

野坂つき子

自惚れに気がつかないまま捨てられる
石積んで女は罪を消すつもり

今治市

月原 宵明

不幸せばかりで祈ること忘れ
木枯へ柳は肩を怒らせる

柏原市

小谷 葉子

秘めごとがあり 美しき姉妹
吹雪く夜の長さに罪の許し乞う

岡山県

池田 半仙

損得を無視して男ノーと言う
鉢の花 無聊の僕に語りかけ

唐津市

桧垣 岩光

この人も鳴かず飛ばすの年賀状
眼が見える夢 嬉しさに眼が醒めて

島根県

堀江 正朗

冬の花 雪には負けぬ彩であり
寒椿 愛のいくさを知らず逝き

八尾市

高橋 夕花

人の世へ第一声を泣き初める
句読点の打ちどこ六十路を考える

京都市

黒川 紫香

反論も無くて卓論葬られ
何色に染めよう逢いに行く心

今治市

原田 一風

暴露へはいはいと言う請求書
西 いわを

京都市

都倉 求芽

大矢 十郎

新宮市

藤井寺市

人生は長く連なる山脈の

倉敷市

水粉 千翁

日本晴れ誰のものでもなく見上げ
叱っては呉れなくなった父の眉

宝塚市

吉田 笑女

反省を前向きにして賀状書く
からすに生れてからすに罪は無い

大阪市

川口 弘生

時計屋のどれもが自己を主張する
雑兵でよし一日を悔もなし

高知県

瀬戸 海州

年賀状みな温い人ばかり
初荷貨車 黒の一徹野に曝し

青森市

工藤 甲吉

ふり向いた野は雪煙が舞うばかり
雲水の祈りに雪が重くなり

島根県

堀江 芳子

白髪染め途切れて妻の慌てよう
吹き上げる雪が迎える北の旅

唐津市

岩下 照沖

雲水の祈りに雪が重くなり
反省へ母の無言が胸を衝く

岡山県

船越 洋之

春の日へ妻も明るい柄を選り
賽の目を振りそこなった後戻り

鳥取市

勝山 紫宏

要領の悪さを笑う汗をふく
道遠しおのが恵方と一歩ずつ

八尾市

大路 美幸

要領の悪さを笑う汗をふく
道遠しおのが恵方と一歩ずつ

大阪府

神夏磯道子

要領の悪さを笑う汗をふく
道遠しおのが恵方と一歩ずつ

岡山県

直原七面山

要領の悪さを笑う汗をふく
道遠しおのが恵方と一歩ずつ

堺市

高橋千万子

島根県
母子家庭 精いっぱいの母の詩

飯塚 虎秋

多摩野市
老眼の世相に合わぬこと多し

岩橋 双虎

東大阪市
蜜蜂の女王を護るすまじさ

竹中 肖二

東大阪市
冷暖房とテレビ人間を駄目にする

竹中 綾女

島根県
ふりむけばわが来し方の細いみち

瀬原 秀子

八尾市
また逢える別れの足はふりむかず

宮西 弥生

和歌山市
弱肉強食 命をつなぐだけ容す

若宮 武雄

今治市
菊の花 老醜をさらすように枯れ

越智 一水

和歌山市
日々を積むドラマ日記に顔がある

松原 寿子

守口市
血税をしぼると虹がやせてくる

羽原 静歩

倉吉市
欲のない男気軽によくしゃべる

奥谷 弘朗

大阪市
着たものに合うた仮面を選っている

西出 一栄

東予市
大根のきりようも言うて市場籠

小山 悠泉

唐津市
何もかも押し除け新芽出でんとす

田口 虹汀

羽曳野市
拾われた日から自由でない小犬

麻野 幽玄

唐津市
おでん屋の隅に孤独を捨てて行く

田中 紫浪

和歌山市
大和路の壁画で先祖判りかけ

沢山 福水

鳥取県

鈴木村颯子

この家の血に生き替り死に替り
生木裂く話 拳で聞いている

小幡 里風

天使になってもいいわよと妻険し
どうにでもなれと思った頃恋し

榎谷 漫柳

神詣りここに極まる計の知らせ
恋失せた背骨に響く自動ドア

島田 昭治

亡き母は夢に出てきて烟を打つ
母ひとり住む灯がくらすぎる

園部 正則

子に任せ四疊半にも広く居り
ネクタイのいらぬ会なら出かまし

柚木 踏草

日がかげり物干竿がじゃまになり
有るふりも無いふりもして女意地

岩崎 実

改元はいやとふらつく足を撫で
嫁がせて今日此頃の淋しさよ

長尾 保

ゆず味噌のあとは柚子風呂の智恵
カレンダーああ光陰は矢の如し

安達 潮音

凡々と暮し五十路の坂があり
一月の暦にきびしい風がある

岩田 三和

二人とも駄目にはしたくない若さ
醉さめに簑を流れるさざめ雪

高崎 雀声

不況風 汗の掟のゆるみ勝ち
来福の笛におどけるうかれ面

原田 明春

花束へ小さな妬み封じ込め
釜揚げの匂い漁場のあたり過ぎ

新川 貞祐

億面もなく恍惚の年重ね
追憶の波は音なく高鳴りぬ

行天 千代

財布の紐締めるほどにも金持てず
財布の紐締めるほどにも金持てず

草深 醉升

医師には見える マスクかけてもはずしても
頂きの白雪 神が甦る

梅本登美也

古日記 面白いのは旅のこと
止り木のままで待とうかホウホケキョ

紅 葉山

下戸で通して宴会好きの社長さん
齢取らぬ主義へ又一つ齢拾う

河野 君子

今治市 萬本 昌道

平田市 久家代仕男

尾鷲市 渡辺伊津志

岡山県 出原 敬一

倉敷市 藤原 健二

大阪市 松本甫久路

唐津市 山下 勝一

橋本市 森脇 善彦

大阪市 欄 蘭

寝屋川市 小林鯛牙子

羽咋市 三宅 ろ亭

唐津市 新岡回天子

出雲市 藤井 晴月

出雲市 高見 鐘堂

松江市 岡崎 祥月

▼投句される方も増えましたが、限られたスペースのため読みにくい点をおゆるしください。なお選者正本水客氏が一年間の感想をP43に書いております。

編集部

— 水煙抄 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

小浜 牧人

禁酒して腹の底まで冬になる

松井 俊風

冬という語は冷たい佻びしさや哀しい痛みを連想させる。冬の酒は好酒家ならずとも寒さ凌ぎに何物にも勝る悦楽である。その酒を断った。そこには禁酒を発心させた酷しい状況があったのである。冬の寒気が加ると共に禁酒した冬の痛みが腹の底まで沁みてくる。この痛みを償いとして現状の救いを希求している。腹の底まで冬——この表現はお見事である。

人ひとり許し歳月重んじる

小谷 葉子

人間は集団の中で生活しているものであって人それぞれ思想、履歴、が異なる利害も一樣でなく複雑な人間関係をつくっている。従って味方ばかりではなく敵もいるのである。そこに欺瞞や、中傷、裏切りや暴力等の不祥事が起る素地がある。この句たまたま何かの裏

切りの痛手を受けた句主がこれに応酬して争うことをせず愛の心を以てその相手を許したのである。然し心の痛みは消えてはいないのだ、許された相手が許した句主の愛の心に気付き反省をして再び同じ行為を繰返さなければ句主の痛みも軽くなりやがて歳月と言う良薬が傷跡もきれいに消してくれるであらう。頼らねばならぬ手摺りの冷たさよ

岩下 照沖

寒い地下から陽の当る地上へ出たい。その階段は急な長い階段でありエレベーターもないのである。老人や身障者は手摺りを頼りに伝い昇るほかない。その手摺りを掴まえると氷のように冷たい、弱者の頼りに思うものはいつも斯様に冷たく扱うのである。それでは弱者はこの冷たい手摺りに縋って階段を昇らねばならないのである。

国の福祉行政の貧困をこの句は突いている。

下を見て歩けば影が落ちていた

高橋 古啓

下を見て歩くのは傷心の道である。心配ごとか悲しみを抱えている、足許には肩を落した佻びしい自分の影が落ちてくれている。この影を見て自分の惨めな姿に気付くのである。

元気を出そう、高い所へ目標を置いて上を

向いて胸を張って歩こう、そうすれば自ら明日への活力が生れてくる。

闇の中自分の姿見えてくる

文川 野生

目を潰して思念を凝らすと闇の中に自分の姿が見えてくる、心眼に映るのである。

働いている姿、悩んでいる姿、或は酔っ払っている姿まで自分の偽りのない姿が現れる、そして彼は私に忠告を与えたり批判をしたり時には褒めてくれたりする、私は彼に依って反省をすること、教えられることが多いのである。いつまでも元気で明るい顔で姿を見せて欲しいものである。

手のうちはいつも受身の黒い石

麻野 幽玄

黒い石を持つのは、いつも弱者庶民である。盤上あちらもこちらも白の強力な攻勢に遭って防戦に必死である。力尽きて死に傾いている一団の黒石もある。物価攻勢と不況の挟撃に耐えて生活基盤を守る庶民や中小企業を受身の黒石と見ての今日への歎きである。

雑踏へ心の洗濯しに女

うっぶんを晴らす着物を撰っている

小谷 清女

沈潜した不満を晴らす、女らしい抵抗である。お気に入りの着物で少しおしゃれをしてデパートを廻る、そこには夢が一杯ある、そして一杯のコーヒーに安らいで憂さを晴らし心の洗濯をする女なるかなである。

以上のほかにチェックした佳句。

いさかいのあとの髪型変えてみる

新川 貞祐

細首のおくれ毛ロマンの夢さそう

山田喜代子

適材が適所に居った汚職劇

渡辺伊津志

愛染帖の選を終えて

正本 水客

愛染帖と取り組んで一年、今月号でお別れである。ひと味違う句をと呼び続けて、それはそれなりの成果はあったと信じている。全没の方が始めの半数以下になってきたのは嬉しいが、それが何カ月と連続すると心が痛む年間一回も休まずに投句を続けた熱心な方は29名、一カ月だけ抜けた方を入れると40名を越す。変らない熱情が花開くのを楽しみにして筆を擱きます。

女シリーズ

菊 沢 小松園

女その時血汐逆流しそうで
手さぐりで互いに肉塊となり果てる
人妻に肩ゆすられる午前二時
犯されるとこはさすがに眼をつむり
だまされたおぼろ月夜がなつかしく

一分間の柳論

穿ち、可笑しみ、軽味、の三要素にひかれて川柳に入ってから二十年。だからながら作り続けているのは三要素の魅力にとりつかれているからでしょう。近頃前衛？詩？川柳の抬頭めさましく川柳誌のかんりの部分を占めるようになってきました。この新しい川柳もそれはそれで感心するものがあり、三要素を川柳味と考えている私には、その川柳味が乏しいようにも思います。路郎先生の川柳には三要素プラス詩があり、その牙城は川柳塔の諸先生によって守られ

伸 どんたく

ていることは心強いことです。私もその後に従って歩きたいのですが力及ばずです。三要素に頼って安住しているとマンネリに落ち入ることになり勝手で、三要素を生かしながらマンネリを打破する手は無いものか、それには路郎先生の作品がヒントになりそうです。しかし川柳は作者の生活体験、内容がにじみ出るものであり、内容の充実無くしては、所詮は言葉の遊びでしかないのではないのでしょうか。



ヤングのための
ガジュアルウェア
Kurabo fabrics
クラブウェア
ガジュアルウェア
倉敷紡績株式会社

古川柳現代解釈法

香 川 醉 々

うではない。ミグがとんでくるのに、対抗し
なければならぬ。軍備費はないが、防衛費
は予算にあり、田中さんや、児玉さん、小佐
野さんはちゃんと、テラ銭をいただくよう
になっているのである。こんな解釈法がで
きないようでは、東大入學はおぼつかない
のである。

愛すかと母泣く顔に咲む棄子

子のない家の門に捨ててのならまだしも、
草の中へ捨てられては、野犬の餌になるか、
鳥に突かれて死んでしまうであろう。別れに
泣く母の顔を見知って、あやしてくるのか
と無心に笑いかける赤子に、からだの力もぬ
けてすわりこんでしまった。どんな苦勞を
しても、また抱きあげることになるのではな
いろうかと、考えた原作者は、きわめて甘
ちゃんだったのである。

現代解釈法ではこうはならない。すなわち
捨てる場所から考えてある。母の顔が見えな
いように、ロッカーを選ぶのである。ここな
ら、野犬の餌にはならないし、鳥につつかれ
る心配もない。母の情けが、きわめて進歩し
たからである。

いひ懸る虚はしゃくりの止業

「なにか隠していることがあるでしょう」と
まじめな顔で問い詰められて、しゃくりの
止まった経験があるでしょう。うしろから背
中をたたくより、心理的なうそ語で驚かした

素人は奇術の

種を

見せたがり

(南 奉)

関西奇術教室

ほうが効果的な、しゃくり止め法である。
親しい人が、大げなをしたとか、なんとか、
刺激の強そうな話題がいいが、あとの処理に
困ることがある。この作者仲々いい所に目を
つけた名句である。現代解釈法によれば、こ
のしゃくり止めの名人に、有名な鬼頭先生
がいる。国会の諸先生方のしゃくりなど一
発で止まったし、最高裁の大先生方など、し
ゃくりどころか、軽く、いなされるという
大達人ぶりを見せてくれたのである。テレビ
出演で、視聴者のしゃくりなど、軽くとめ
ていただき、大いに感謝されたのである。

片仮名は能書もしれず流もなし

ぶっさらばうな片仮名は字の上手か下手か
もわからぬ符号にすぎないし、めんどろな流
派もない。それゆえに、きわめて実用的であ
り、どんな世界にも堂々と通用する利点を持

丸腰は胸を剣の空鞘か

刀を持たぬ姿が、敵意を持たぬ形として世
間に通っているが、そんな表面だけで人の心
を信じてはならない。胸は心をつつまかく
し、腹に何を思っているのかわかったもので
はない。たとえ相手を殺したいと思ってい
るとしても、その真意は外から見ることでは
できない。これが原句の意味であろうが、現代解
釈法ではそうではない。これは憲法第九条を
詠ったものである。丸腰というのが、決してそ

つわけである。せつせとかせいで楽なくらしをするのも、片仮名の処世のおかげといえる。と古川柳の作者は説いたのだが、この解釈はすばらしい。現代解釈法でもこの通りである。

「ピーナツ」「ユニット」等、みごとなものである。能書もいらぬし、田中流という必要もない。読者諸兄も大いに服用しなければならぬ。

富士を見る亭に掛絵の不二とどし

富士を遠望する風雅な亭に、そこから見える富士の絵がかけてあつては興ざめであり、亭主の無神経さがいやみである。現代解釈法で簡単にいえば、成金趣味のことである。とくに、土地成金に、この傾向が多い。錦鯉に下駄ばきで、ふをやっているどこかの国の成金の写真を新聞で見たことがあるが、この句は、江戸時代に、すでに予知しているのである。

俄雨草履と下駄と飛鳥川

夕立に出会った雨宿りの庵の土間は、草履と下駄が入り乱れて、どちらが今日の履物であるのかわからない。晴天だと思っていたのに、大雨となる感じが、「飛鳥川」の川瀬の変わりようとびびきあっているのである。

現代解釈法では、ロッキード事件の灰色高官を詠んだ句になるのである。草履か下駄かまさに、受けとったのか、そうでないのか、

まことに飛鳥川の川瀬のごとく、我々国民にとつては、定かでないのである。

僕が身は西瓜か殿の稽古針

身につまされる句である。主従の関係が絶対服従と定められた社会では、家来の腹は、練習用の西瓜のようなもので、簡単に切られるのであつた。

現代でも、このようなことは、たんとある。お抱え運転手が、自殺したような例も最近にありました。

松本清張氏の作品には、いくらでも、かかる範例があげてある。フィクションではあるが、モデルは常に存在している。

山出しの禿かはむく日居風呂

簡単にいえば、スター誕生である。九州の片田舎の山出しの女の子でも、さつとスターにつくりあげる人形師の腕前、江戸時代も、現代プロデューサーもそう相違はないのである。歴史は夜作られ、スターは、テレビ学会でつくられる。

今年は、南の宿からがきつとヒットすることになるだろう。(ある予言者の予言)



では古川柳現代解釈法も一応のけりとしましょう。古川柳にもいろいろな楽しさがあります。むずかしい考証は、またその専門の方にお願ひして、もっぱら読んで楽しむ方にまわっておきましょう。

いずも川柳会 創立五〇周年 記念川柳大会

時 52年6月12日午前10時
所 出雲市体育館大ホール

講師 川柳塔社主幹

中島生々庵氏

兼題選者

川柳塔社副主幹
川柳岡山社主幹

西尾 栞氏
大森風来子氏

ふあうすと川柳社
鳥取県代表

田中 好啓氏
河村 日満氏

島根県川柳協会

柴田 午朗氏

本会

尼 緑之助

会 費 一、〇〇〇円

詳細は次号に発表します。

黄銅六角ボールトナット
及び特殊換物 全般

合資 会社
西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL 三四五二一四
夜間 四四〇八

緑

八木千代選

つつましく土もち上げてみどりの芽
柳の芽道行く人の肩にふれ
春そこに淡い緑の蔭の臺近江
せめてサインだけでもミドリにする平和
坂道のジャパンに緑帰せるか善彦
雨蛙神が与えたうす緑方大
舗装路の割れ目に緑見付けた日一風
緑から先の無い虹が好き漫柳
笹の葉のみどりが冴えた焼肴正則
詩情ふと緑したたる駅に降り洋々
赤字線緑の野山縫ってゆく夕路
深雪に青菜見出すことも幸静枝
フェニクスの緑が堺二つ割り貞祐
落のとう今年の緑もう告げるみのる
緑の葉かげに白い白い露の玉祥月
ハンディはどうあろうとも眼に緑どんたく
柳はみどり目高を知らぬ子と歩くベ女
緑の空気吸いに来ました無人駅里風
信号の緑何ともあったかい紫宏
キャンパスを躍動させて緑もえ白水

双肩に緑を守る職に生き
大都市の緑は苦しうに生き
緑色似合う若さの羨まし
緑十字汗が光っている現場
ふるさとを偲ぶみどりを鉢に植え
緑の風招く病間の窓を開け
芋虫の緑を食べた色で落ち
窓あけて新緑の候と書く便り
クレオンの緑が減らぬ街に住み
演壇に松の緑がある日本
語るごと古代の壺のエメラルド
野仏の裾から緑萌えてくる
北国の夢はみどりの野を駆ける
雑草のみどりいきいき朝の靴
故里の母と緑が呼び戻し
屋上の緑へ野鳥飛んで来る
せめてもの救いは左遷地の緑
緑色好きで悪人にはなれぬ
佳
新緑が萌えて名所を引き立たせ
列島へ陛下緑の使者になり
窓口はみどり俸せ売っている
忠魂碑みどりの草にいたわれ
寒空はみどり猫背を叩かれる
人
みどりの羽根トップでタイムカード打つ
迷わずに生命の色を緑とす
地
可住
右近
横文字の読めるふりする婦人帽
軍配は婦人に上る飲み競べ
慌て者婦人警官とも知らず
敏

婦人

野坂つき子選

天
一鉢の緑があつて人が住む隆子
軸
緑ひと芽ベッドにいのち信じさせ

婦人部を発展させぬ古い顔
婦人会ちよびり男の智恵も借り
三対一我が家の婦人層厚し
出稼ぎの村は婦人の手で守り
婦人票スマイルだけではすまされず
婦人部の唄は男をおしまくる
婦人部の唄は男をおしまくる
家計簿のここ一豊の妻となり
アンケート婦人も意外浮気好き
婦人会酒も予算へ入れて組む
婦人会初老の妻が苦返り
勇ましい婦人に割り込まれた不運
当分は子供生むまい共稼ぎ
横文字の読めるふりする婦人帽
軍配は婦人に上る飲み競べ
慌て者婦人警官とも知らず
敏

吟 題 課

御婦人の力は神代から強し
知つていてわざとらしさを婦人見せ
皮コート婦人は似合うことと決め
婦人から女に戻る鍵さがす
婦人会ジュースで酔うたうたでなし
飲む席へ婦人同伴氣にいらす
貴婦人の指輪イミテーションには見え
ブーツ流行たまには見たい脚線美
婦人運動に徹してはまだ独り者
賢婦人哲学じみた離婚する
酒が出てすこし尻尾を出す婦人
婦人服ちゃん男の目を意識
テレビからウーマンリブを吹きこま
会長も女化粧に金をかけ
貴婦人の過去にうるさい週刊誌
婦人科へ悲しい愛を捨てにくる

住

金かけて似合わぬ服で行く婦人
ママにないやさしさ婦警に話すA
婦人誌の知識で夫を評価する
すれ違う婦警にあった女の香
喋るからお里が知れた令夫人
喰いぶちを稼ぐ婦人にある強さ
すんでから意見が出てくる婦人会
特大のヒップ自信に満ちている

天

地

人

女傑今日酒の力を借りて泣き

軸

彼 岸

小野克枝選

お彼岸へ善男善女の香揺らぎ
彼岸にも帰省の出来ぬ忙しさ
老いの冬越せた彼岸の寺詣で
お彼岸へ老婆の腰がしゃんと伸び
ハイキング兼ねて彼岸の墓参り
還暦の法話眠りながらも有難し
お彼岸の陰にひっそり忠魂碑
お彼岸の楽しみ植木鉢を買う
一坪の庭へ彼岸は時く準備
彼岸無事終え再婚の腹を決め
猫柳のうぶ毛彼岸の雨に濡れ
墓石洗う彼岸の老婆の背が丸し
彼岸会に説教上手が笑わせる
陽の照らぬ家で彼岸を待ちわびる
往生を願う彼岸へ舟を漕ぐ
彼岸寺嫁が引いている姑の手
彼岸会に亀驚かす天王寺

あんな頃私にあった彼岸花
彼岸には帰れと見合のお膳立
お彼岸のお布施も不況まぬかれず
悔恨のはじめ彼岸の香に問う
試歩少し伸びて彼岸の墓に佇み
此の岸で燃えていたのさ彼岸花
初恋の人にも会って来た彼岸
大望の彼岸私の句碑が建ち
彼岸参り帰ると足をもんで
迷いから覚めて彼岸に到達す
彼岸にはまだまだ雪のある過疎地
お彼岸の墓に繁昌振りを告げ
彼岸花ひっそり無縁墓地で咲き
いら立ちは向う岸なる君へ思慕

住

天

地

人

初步教室

題 — 「珍」 —

本田恵二朗

脳は酸素で働いている。呼吸によって体に取り入れる酸素全体の2%は、脳で働いている。二十分間酸素が断えたと脳はボケてしまう。これは国大医学部の教授から直接聞いたことなので間違いのないことである。

そこで私は思ったことであるが、脳が働く2%の酸素に匹敵するものが川柳作句へも常時不可欠であると思いついたのである。それを仮りに作句酸素と名付けて、その追究をこころみることにしたが、この作句酸素も、二十分から三十分ほどでボケ現象を呈してくることが発見した。ボケ現象のままで尚作句を続けるよりも、新しい酸素を補給する時間を与えた方が、作句力を倍加することも併せて発見したのである。但し個人差があることは言うまでもない。

作句酸素の発見をこころみて欲しいとおもう。

珍奇さにとけ込む若さうらやまし 喜美代
珍らしき追うパッションがうらやまし 同

(珍奇さにうまくセンスを交えて着る)

(珍らしき追うて追い抜くのも若さ)

珍芸を披露満場大喝采

(銭がかかったらしい珍芸で座を沸かす)

珍客へボトルを開ける温い部屋

母の歳とどめた珍しい写真

(珍らしや写真の老母はまだ少女)

(珍写真老母あどけない美少女で)

珍事の五ツ児日本に仲間入り

(珍らし五ツ児日本の豆スター)

どぶ市へ珍品あさる夢がある

珍客が空気を和げる助けさせ

緊張をはぐす珍談で議事すすむ

(珍問答に議場の固さほぐされる)

珍客が縁で師の手と足となる

珍客へ夫は蟹出せ地酒出せ

(珍客を蟹と地酒でからめとり)

和気の満つ珍談も聞く老いの部屋

(珍談も飛び交う老いの部屋の和気)

ふるさとの珍肴も出て回顧談

(ふるさとの珍肴にはずむ回顧談)

珍客へ話題を拾う写真帖

珍談奇話酒席に花を添え

(酒の座に珍談珍話の花が咲き)

珍らしく麦めし炊かせたところ汁

(珍らしい蛇が賀状に居つてくれ)

疎遠なる人の電話は若い声

(珍らしい電話の声が若過ぎる)

鐘堂

同 幸

岳麓

同 静枝

那智子

同 静泉

貞祐

同 翁童

同 無人

同 茂美

同 同

珍優の素顔市井に生きる貌

当人は真面目珍聞絶えぬ人

(珍聞奇聞真面目な顔で時き散し)

珍らしい父の手料理母旅行

(母は旅父の手料理珍らしく)

(母は旅父の珍妙な目玉焼)

珍らしくないほど通る救急車

露杖

同

静佳

同

西 山茶花の県文学選奨受賞並びに句集「山茶花」発刊を一つの機縁として川柳大会を開催します。
川柳を愛する皆様の御参加をお待ちして居ります。
日時 52年3月6日9時半〜15時半
会場 岡山市駅前町二一三三十一 桃花苑

時 時 時
10・30 兼題締切り
13・00より披露・兼題と選者
「舞台裏」 丸山弓削平
「花屋」 田中好啓
「茶」 坂根寛哉
「山脈」 橋高薫風
「持論」 大森風来子

会 費 各題三句に呈賞
二千円 句集「山茶花」並びに発表誌及び昼食券呈

主催 米の木グループ
後援 川柳岡山社

(ピーポーピーポー珍らしくない音かなし)

俊風

珍らしい雪に晩酌まだ続き

(珍らしく父の冗談難察)

同

(初雛へ父珍らしくきげん酒)

山海の珍味へもつたいなくも下戸

利美

珍芸は二次会までのお楽しみ

同

珍品にしても家建つほどの金

(珍品だそうだが家建つ値だそうだが)

山海の珍味も真心には勝てず

健二

エリートの密かに持ってた失敗談

同

(エリートの失敗談を珍らしくり)

珍客へそろそろそろと降りて来る

保夫

(珍客をがんにじめに取囲み)

同

珍らしい家宝に時価をつけてみる

漫柳

(珍らしい土産が案外まずかった)

珍らしくない品一杯に親心

同

(珍らしくもないもの重そうに母)

飄太

珍らしい我が家の家系に驚かす

同

珍らしいもん食いのくせすぐに飽き

同

(珍らしい名前を浮動票が買ひ)

同

珍らしい名前に浮動票が買ひ

同

珍らしい名前に浮動票が買ひ

同

珍らしい名前に浮動票が買ひ

同

珍らしい名前に浮動票が買ひ

同

珍らしい名前に浮動票が買ひ

同

珍らしい名前に浮動票が買ひ

同

珍らしい名前に浮動票が買ひ

同

珍らしい名前に浮動票が買ひ

同

珍らしい名前に浮動票が買ひ

同

老父母の珍客へ子も孫も寄り

同

(老父母の珍客囲む子も孫も)

同

珍妙な歌声うちの息子ら

同

娘の手製珍菓出てきて手がすくみ

同

(珍妙な味で子娘の手製菓子)

同

老いの目に珍奇激動世が移り

同

(老いの目になんとも珍奇な世の移り)

同

別珍の足袋へ明治酒をつかしみ

同

(大正の足が別珍足袋を恋ひ)

同

瓶型が珍らしいだけの酒が売れ

同

(瓶型が珍らしいだけで売れる酒)

同

珍芸の持主最後をしめくり

同

(珍芸でワットと湧かせてしめくり)

同

午前様妻の笑顔が珍らしい

同

珍らしく空いた不況の連絡船

同

珍味瓶並べて留守のコップ酒

同

(瓶詰の珍味で留守のコップ酒)

同

珍客へ家族ぐるみの味と色

同

珍客へ飲める相手を借りに行き

同

奇型魚を珍魚と言わす汚染水

同

初孫の珍らしき消え五月蠅き過ぎ

同

珍らしく無口になった訣れの日

同

可愛さに祖父珍らしく叱る顔

同

珍らしい種も仕掛けもある玩具

同

珍客をだしに朝から酒びたり

同

見る人が見れば珍品かも知れず

同

奥谷弘朗句碑建立と記念句会

『北壁の男らしさを観て飽かず』

建立地 鳥取県西伯郡大山町大山寺(倉

吉宮林署大山治山事業所敷地内)

建立時期 昭和52年4月29日(祝日)

★宮林署の庭に、句碑を残す話が出て「大

山をわが庭にして男生き」の句碑を建てる

準備を進めていましたところ、同じ建てる

なら国立公園大山に建立しては、というこ

とになりました。

日時 昭和52年4月29日午前10時

会場 鳥取県西伯郡大山町大山寺

大山観光会館ホール

兼柳話 中島生々庵・堀口塊人

兼柳話 (各題共に三句以内)

「大山」 西尾 葵選

「還暦」 尼緑之 助選

「定年後」 加賀 破竹選

「口癖」 若本多 久志選

「無欲」 大森風来子選

「自信」 沢 車 楽選

「縁起」 藤井 明朗選

特別題「交通安全」共選 菊沢小松園選

締切 午後1時30分(出句は出席者に限

ります。席題なし)

呈賞 各題秀句に倉吉市長色紙

会費 一千元(昼食・記念句集代)

主催 倉吉打吹川柳会(〒682

倉吉市下田中五二八〇六)

大 萬 川 柳

「予 告」

入 選 発 表

選 者 川 村 好 郎
投 句 総 数 六 百 十 句
入 選 七 十 五 句

ちよつとした予告へ波紋大きすぎ

東大阪 美子

倒産の前ぶれもなく消えている

神戸 牧人

ぜい竹が女心を見た予告

松原 重人

招かざる客が予告の電話来る

和歌山 富子

なぞめいた言葉が予告かも知れず

大阪 好一

予告する胸に打算が同居する

富田林 花梢

家建てたのに転勤を予告され

箕面 一本杉

確かなる予告胎児がうごき出す

大阪 君子

いちど邪魔しますと無心に来る予告

堺 一二三

よい予告らしい朝日がすばらしい

大阪 ます元

病人に知らせぬ予告を聞く廊下

和歌山 英子

値上りの予告に店の品が消え

笠岡 古庵

地震説信じてからの及び腰

守口 右近

予告した政府へ景気そっぽ向く

岡山 柳五郎

好きという予告と知ったブレンゼン

鳥取 日満

爆破魔の予告へ欲しい逆探知

奈良 カズエ

予告して心づもりをさす左遷

大阪 文秋

この愛を捧ぐに予告などしない

鳥取 露杖

おみくじの予告を捨てたり信じた

和歌山 武雄

不況風解雇予告に冷たすぎ

泉北 春栄

退職の予告へ無口な人となり

倉吉 弘朗

地震説予告の是否で揺れている

大田 軒太楼

予告してきた税務署で軽くすみ

羽曳野 幽玄

予告せば逃げるし不意では無理と逃げ

西宮 百酒

予告ない命へ明日の地図を書く

和歌山 としを

予告して波紋の外で見るスリル

鳥取 茶人

さわりだけ思わせぶりの予告篇

大阪 満津子

映倫にすこし切られた予告篇

八尾 酔々

予告篇ない人生のドラマ観る

和歌山 与史

バンド策やるぞやるぞと裏をかき

東予 悠泉

予告もなしに来て酒を飲み飯も食

倉敷 素身郎

予告なく母喜ばすプラン組み

鳥取 洋々

予告ない人事異動でど肝抜く

岡山 七面山

銀行の予告が怖い期日来る

橋本 木魚

予告せぬ婦省は老母を喜ばせ

呉 英詩

泣きにくる予告はしない里帰り

今治 昌道

周期説忘れたように伸びるビル

産みますの一語に尽きる話し合い

堺 憲祐

ぬけがけの予告を女持ち歩く
先ず予告して反応を待ってみる

貝塚 つき子

雪解けは春の予告の音で鳴り
死の予告ないから明日へ夢を抱く

倉敷 健二

予告篇見てきた子供に口説かれる
予告なしの客に昼時ねばられる

大阪 千代

コンパクトの鏡が破れている予告
とりあえず電話をしとくよい知らせ

大阪 智子

予告ない人生航路の浮き沈み

八尾 美幸

素晴らしい明日を予告する夕陽

八尾 幸

予告無視すれば病魔が腰をすえ

久子

集金日予告の裏を行く時刻

和歌山 久子

いたずらな予告電話へ走るパト

八尾 夕花

茶ばしらの予告に電話したくなり

八尾 夕花

占いの予告どおりにゆかぬ恋

八尾 夕花

そう云えば夢が予告の身内の計

枚方 珠笑

早々に噂が予告した人

枚方 珠笑

予告ではもつとハンサムだった人
予告してあった金策ままならず
含みある予告が警告ともたられ

奈良 保夫

(原稿締切毎月末)

一八〇〇円、送一六〇円

大地」清造選「再会」いさ

を横にして三、葵徳三の号

主崔平安川柳士



▼1月16日の本社新年宴会を兼ねての六百号記念「旅人」普及版の打ち合わせ会。(全員撮影は製版不能で割愛) 右から小松園・生々庵・柴・一三夫・一人おいて水客・(後ろ向き) 左から薫風・酔々・雀踊子諸氏(大成閣で万的氏撮影)

はそこから生まれたとか。路郎選時代の大万川柳の選者にもなったように記憶する。三月六日に市立六甲勤労市民センター五階(国鉄六甲道駅隣側すぐ)で鈴木九葉・炎徳三追悼句会開催。題「難木林・雲・鈴・左覚・芽樹」。

▼同人の動向△

▼尼緑之助氏(出雲市)から雪のため掘炬燵に押し込まれ、そんな中から六月十二日の大会の成功を祈っています。51年度のいずも賞は「善人の耳で火の粉は消

えていた―大谷ひさお―に決定。また飯塚虎秋句集「白い山茶花」出版祝賀句会は盛会でした。

▼山内静水氏(竹原市)は故季賛氏の遺句集と「竹の里」七七名参加の句集編集中の多忙の中で故季賛氏二男博志氏の仲人役も引きうけられたと。

▼橘高薫風氏(豊中市)は第11回白百合社主催・岡山県川柳大会で席題の選もされたが、岡村久志良杯に輝き大トロフィーを獲得。出席二九名の盛会だった。

▼伊藤茶仏氏(小松市)は4月3日の番傘北陸川柳大会で「旅情」の宿題選者として出席される。(投句辞退とある)

▼新岡回天子(唐津市)は新聞へ欧州川柳の旅を11回連載で執筆。川柳家の目にとらえた欧州各地の風習などが楽しく読ませる―西欧で買ったジャパンの輸出物―回天子。

▼高橋鬼焼氏(東広島市)は第27回新年歓交36題川柳大会で第四位、トロフィーを獲得。

▼高橋夕花さん(八尾市)は51年度の菜の花トロフィーを獲得された。

▼戸田古方氏(豊中市)は1月11日に救急車入院。市民病院へ救急車で入院(病室は南二階二二二号)されたが術後の経過は良好とのこと。神谷九郎氏と安藤寿美子さんから連絡。

▼福田丁路氏(高槻市)はたびたび編集部をねぎらつてくださる。お礼申しあげます。

▼3月の句会▼
▼菜の花句会は10日6時から、西郷会館(八尾神社境内)近鉄大阪線やお下車南歩約一分。会費三百円。題―時計・春闘・コヒー・酌ぐ。席題二題。各五句以内。投句郵券百円。〒581八尾市高安町北一の二五。大ピンチ。

▼南大阪川柳会は20日6時から、松崎町三丁目大萬で開催。題は―無欲・ヒント・草花・とどく。▼東大阪川柳会は26日6時から、東大阪市立中央公民館二階第二集會室で開催。題は古都・卒業・芽生え・

路美幸宛。▼堺川柳会は12日6時から八木摩天郎店で開催。題は―跳ずむ・ゆとり・入れ替え。題は折詰・上向き・一時逃れ。

▼南海川柳会は17日6時から南海電鉄本社食堂内で開催。題は折詰・上向き・一時逃れ。

▼南海川柳会は17日6時から南海電鉄本社食堂内で開催。題は折詰・上向き・一時逃れ。

▼南海川柳会は17日6時から南海電鉄本社食堂内で開催。題は折詰・上向き・一時逃れ。

何を選んでいただくかは先様におねがいしてタカシマヤの商品券をお贈りするのにも心にくい贈物かと存じます

一〇〇円から
一〇〇〇〇円迄
大阪・東京・京都
3店に共通です



大阪・なんば
東京・四
京都・西

高島屋

踏切で子の手しっかり掴まれる
踏切を待つ足もとのつくつくし
踏切のラッシュ暮らしの音が行く
踏切の土手にたんば春の色
無人踏切地蔵様に番をさせ

牧人
潮花
幸

逆風に耐えて柳の顔すずし
逆風へ四十五度で対抗す
逆風がその限界をテストする
逆風へ立つ時男の顔となり

蘭
庸佑

逆風に意志の弱さを試される
逆風に打勝つて風高く居る
逆風に小便小僧負けていず
逆風に負けず心の灯をともし

あいき
維久子
潮花

平凡な日々逆風をさけそこね
逆風に一と先ずこは帆を下し
逆風へ砂は逆うすべがない
逆風へ文左エ門の意気で発つ

一念
右近
柳宏子

逆風に押されて人を理解する
逆風へ嫌天下が帆を降し
ふきまくれ逆風生きる心は捨てないぞ
逆風へ涙線弱き女かな

鬼遊
吸江
雀踊子

逆風に欲しい情性にあきた日日
逆風に怯むくことなく渡り鳥
逆風に男は賽を賭けてみる
逆風を大樹の蔭とやらで避け

吸江
庸佑
一三夫

逆風を心の鞭に受けとめる
逆風のなかに真心灯をともし
逆風にしなう柳の底力
逆風にける悪運で策き上げ

小松園
君子
水客

逆風を勝ち運までも吹き飛ばし
逆風を心の鞭に受けとめる
逆風のなかに真心灯をともし
逆風にける悪運で策き上げ

岳人
醉々
鬼遊

逆風にける悪運で策き上げ
逆風に勝てぬ日記の白つづく
逆風に叛いて明日の彩つかむ
逆風へ躊躇する背を叩かれる

紫香
鬼遊
醉々

逆風へ躊躇する背を叩かれる
定退へ逆風再職の門閉ざし
逆風に母は本領發揮する
逆風に親子の止り木揺れやまず

清女
軒太楼
亜鈍

逆風に親子の止り木揺れやまず
逆風に母は本領發揮する
逆風にける悪運で策き上げ
逆風に勝てぬ日記の白つづく

逆風へ男の意地がつつ走る
逆風に耐えて知り得た人情味
逆風に決断迫っているマスト

兼題「逆風」

金井

文秋選

一栄
夢酔
古方
誓二
弘生
福水
与呂志
寿美子
鎮彦
瓢太
一念
一舟
凡九郎
雀踊子
千万子
いわを
肖二
柳宏子
恒明
滋雀
水客
和雀
滋雀
太茂津
形水
百酒
和子
小松園

逆風に耐えて草は身を護る
逆風に野仏像を閉じている
逆風にはばまれ秒針には追われ
矢面に立つ逆風をやわらげる
逆風の止むときまっすぐ背を伸ばす
順風に乘つて逆風に備え
逆風の中で男を確める
更生の足逆風を突いて行く
兼題「灰」
岩本雀踊子選
あくぬきの灰につながる亡母の顔
灰色の代議士が持つロバの耳
物思いタバコの灰がのびている
もみ消した灰に未練が少しある
原稿へ貰の長さだけの灰
明日からは人妻となる文灰にする
死の灰を伏せて仲良くしませんか
薬灰を知らぬ子供にどう話そう
灰皿は妥協の線を折つてる
束の間の命は燃えて灰となる
灰皿に不倫の臭い残ってる
燃え尽きた豆炭にある灰の意地
練炭の灰捨て兼ねるアスファルト
灰となるいのちの重み確と知る
線香は香り残して灰になり
燃え尽きた灰のかさで捨てられる
薬灰に抱かれて埋火が眠る
灰皿に議論倒れの無駄な煙
灰色の空に都会の顔がある
焼け跡の灰に涙の火が残り
話題より煙草の灰が気にかかり

あいき
勝美
右近
あいき
幸
庸佑
天笑
文秋
柳信
弘生
登美也
克枝
亜鈍
静馬
多志
としよ
肖二
形水
鬼遊
与呂志
鎮彦
智彦
珠笑
小松園
光代
与史
醉升

埋れ火を抱いた灰に騙される
その灰が散る日はきつと晴れるだろう
灰皿の灰が忠告してくる

高官の名は灰色で見えにくい
灰色の中でくすぶる意地っぱり
煙が消えると灰がしゃべりだす

人生の灰振りかぶる坂を踏む
灰色の空へ自由を書いて見る
埋れ火の灰に余生を支えられ

灰にする女の偽装かも知れず
灰皿の灰に温もりある話
どんでん返しをひとつ終った灰である

死花がとてきれいな灰の白
灰になる日のため祈りをたくわえる
一握りの灰の重さの父となる

兼題「祈る」
西
いわを選

御利益は問わず祈りにある安堵
おだやかな朝日背に受け初祈り
岸壁の母の祈りへ風も哭く

夕焼けに祈れば遠い子が笑う
未熟児へ祈る思いのサンソ瓶
合格祈願絵馬に負担がかかりすぎ

泥くさい祈りパチンコ玉強く
祈り持つ家庭へ優しい風が吹き
祈つて少女は神様信じきる

子のために祈り絆を深くする
俤せへまだ欲望がある祈り
十字架の祈りへ罪が小さくなる

写経する筆に祈りの墨が乗り
祈る掌の隙間に欲がこぼれかけ

君子 幸生 智子 川狂子 柳宏子 柳度 与呂志 光代 儀一 千万里 鎮彦 天笑 太茂津 美幸 雀踊子 西 柳信 秀峰 福水 克枝 多志 静馬 鬼遊 雅風 智生 野子 文秋 雀踊子 柳宏子 滋雀

祈ってる男の部屋を覗かれる
よく食べてよく寝て祈ることもなし
石を持つ祈りを鳩は信じない

生活の智恵がときれて陽に祈り
参道の汗に祈りを深くする
冬の塔祈る心を持つている

日々祈る母の心に神が住む
真夜中の神を起している祈り
祈り天に通じかちと持ち直し

祈つて女に倅せな日が続く
無心に祈る少女の指が透きとおる
土たん場で無神論者も手を合わせ

だまって拝むだけで心晴れました
礼まいりもう賽銭を出し惜しみ
地平線揺る祈りミレーの絵

薬にすがる祈りにもエゴつきまとい
封をして祈る少女の瞳の一途
本当の祈りは無我の中にあり

修業僧の祈りに寒の水暖かし
祈らずにおれぬ計報を握りしめ
敬けんな祈りの女眼鏡かけ

北の海祈る妻子へ凍る風
でるる坊主の祈りをご存でしうかね
だんだん欲が深くなつてきた祈り

絶叫を滝にぶつけている祈り
折り鶴の一羽が祈る風の彩
神と結ぶ祈りの糸をしかと持つ

死刑囚の瞳に明日のない祈り
梵鐘は仏の声と祈られる

兼題「雑音」
大坂 形水選

野子 智子 美幸 生々庵 喜風 水客 千万人 岳人 瓢太 野生 夕花 和子 三十四 一二三 右近 幸太郎 君子 柳宏子 維久子 滋雀 栗 川狂子 醉々 天笑 柳宏子 醉々 醉々 潮花 柳宏子 柳度 与呂志 光代 儀一 千万里 鎮彦 天笑 太茂津 美幸 雀踊子 西 柳信 秀峰 福水 克枝 多志 静馬 鬼遊 雅風 智生 野子 文秋 雀踊子 柳宏子 滋雀

雑音に紛れて平和な貌で居る
雑音に生き静寂がこわい子等
雑音があり賛成の手を降す

雑音がないとすこしたよりなく
雑音を避けて波紋の外にいる
雑音に追われ敗者の影を曳き

雑音の中から再起の芽をつかむ
雑音は海外放送らしくする
雑音に馴れた都会にあるリズム

マスコミを雑音として片付ける
念仏で雑音消して亡母と会い
雑音のベールの中でささやかれ

浮世から雑音が来るを温め
雑音の街で小さな果を温め
雑音へ母忙しい手を取られ

雑音が勉強部屋の窓たく
雑音の底で生きてく知恵を持つ
栄進の話へ雑音多すぎる
雑音へ世間の丸味見えてくる
週刊誌から雑音がひどくなり
雑音をシャットアウトして木魚
雑音に負けぬ一矢を持つゆとり
雑音の声雑音の中に消え
雑音と一緒に聴いたことのり
雑音の一つに父の稽古三昧
胸の鈴雑音としか聞こえない
雑音が経営学を狂わせる
雑音の中で真実を呟やいた

弘生 どんたく 克枝 福水 古方 一栄 静馬 多志 漫柳 柳宏子 三十四 一舟 天笑 紫香 潮花 雅風 紫香 水客 庸佑 静歩 牧人 千万子 野雀 鬼遊 潮花 水客 野一三夫 野生

雑音の中の陰口よう聞こえ
俺の鈴雑音などにふりむかず
雑音を背に感じて靴をはく
雑音にユーモアがあるパチンコ屋
雑音に混る味方を聞き分ける
雑音の中で静かに飲んでいる
雑音の真ん中を行くド根性
雑音に消えたサヨナラもう追わぬ
雑音にされる働く者の声

(一月句会分)

兼題「海」

中島生々庵選

テトラポッドで二百海里を埋めたいな
茅渚の海金波を割って新年生まる
汚染した海鳴り怒りの声がする
網元に今日も不漁の海が鳴る
二〇〇カイリの線が火花を散らす海
万帆張る練習船へ夢を乗せ
決心は朝日に映える海の色
海もただ見るだけの年となり
老骨に海軍魂ひそと秘め
波の瀬のささやき知らぬ真珠貝
人生の海執念で泳ぎ切る
朝の海一直線に明けてくる
島国の周囲の海がまなならず
荒海の底は静かな世界あり
とどかない叫びが北の海にある
小包みが匂う友から海の幸
泣きに來て海の広さに論される
海広く碧く小さい私です
断崖に砕ける海の独り言

百酒 生々庵 小松園 道夫 滋雀 天笑 美幸 形水

福水 清女 登美也 柳信 夢醉 祥月 東天紅 一栄 雀踊子 公子 好郎 好郎 滋雀

語り継ぐ海のロマンを親子船
海鳴も波の荒さも冬の詩
夕焼けに海の男が仁王だち
慰めて欲しい女は海を見る
移民船点となり海へ消え
生物を育てる力海動く
荒海にあしたを賭ける男意気
海鳴りの太古の声を聞く闇夜
亡父呼べど帰らぬ海は今日も荒れ
帝国の海が墓標を抱いている
海へ來て海の広さに手をひろげ
潮騒が聞える母の初便り
潮騒の音も冷たい北の海
海今日も負けて勝つ波ひいてゆく
そんな時男は海へ逃げにゆく
泣きに來て海の広さに教えられ
赦し合う涙は海から湧いて来る
遭難の海に向って祈る夜
生まれながら海に育った肌の色
寛容の海に甘えてはならぬ
二〇〇海里の縄張りよそに泳ぐ魚
海を見ていて許されるばたん雪
黒い海に吞まれる心になつてくる
限界の汚れをくぐる海女哀し
出漁の船先揃えて海は風ぎ
潮騒をかじかんで聞く酒甘し

滋雀 一念 敏幸 庸佑 美幸 維久子 武雄 多志 一念 野生 智子 右近 水客 つき子 ベ女 幸 蘭 文秋 重人 好郎 形水 天笑 柳升 生々庵

(河井・庸佑・整理)

川柳塔社常任理事会(2月4日)

豪雪だよりしきり、そんな日の常任理事会で

ある。

議題は、旅人・普及版のあれこれで、生駒の麻生家の意見もうかがい万全を期している刊行会一同である。

七行組で書きおわったものを五行組になったため薫風さんが書き直す。丸二日はかかる仕事である。

出席諸氏が路郎先生の軸、色紙、短冊を持ちより、口絵三ページの厳選。表紙の色もきまり、着々進んでいる。

運営部を代表して、多久志氏から経過報告があった。この物価高を乗り越えるには、どうしても詰代を五十円だけ上げざるを得なくなつたと、重い口どりで諸氏の意見を求められた。結局四月号から四百円になる。

出席—多久志・百酒・いわを・栗・薫風・生々庵・牧人・柳志・太茂津・小松園・岳人(写真製作)—一三夫諸氏。

▼新年宴会をかねた六百号記念の打ち合わせが16日心斎橋大成閣で開かれた。

「旅人」普及版の刊行委員長は中島生々庵主幹。大会委員長は西尾栗副主幹、当日の司会は西田柳宏子氏、開会の辞は川村好郎氏、閉会の辞は若本多久志氏とさきまる。

これらの打ち合わせが三時間半もつづき、いっぱいのはうは一時間半というこで、左党の方にはお気毒でした。

出席—栗・静馬・百酒・酔々・柳志・水客・一三夫・与呂志・好郎・太茂津・肖二・雀踊子・生々庵・万的・岳人・薫風・牧人・小松園諸氏。

各地新聞

▼かならず原稿用紙にペン書きで文字は楷書。締切毎月末着便まで。21行以内。十七字以内の句に、下三マスに雅号。

富柳会、菜の花合同吟行句会 (鬼遊報)

紅葉描く筆から冬がしのび寄る
 柚子の里京に田舎と言ひ得たり
 園車のひとつとなつて世を渡る
 明日散ると決めて紅葉は夕映える
 柚子有情女は楚々と香をまとう
 風流もなく陸橋を渡りきる
 夕暮れて古都は弥陀の瞳に沈む
 秋風のおんなに燃える山紅葉
 十二月何處も倉の戸を開ける
 職さがすために順待つ渡し舟
 日めくりを逃げて柚子湯に身を浸す
 甘酒を冷ましてひとりと観る紅葉
 建仁寺垣相国寺垣京美人
 米倉へ外車を入れる四代目
 故郷のない男が好きなら渡し舟
 小じんまり香う店ある古都の路地
 木守柿村に松尾の姓多く
 倉の中で返事をすればお染めき
 山すべて不惑の色にする紅葉
 十二月十二日五右衛門風呂に柚子を入れ

漫柳 岳人 君人 牧子 花梢 幸生 夕花 文秋 美代 鬼遊 智子 小松園 美幸 維久子 薫風 柳太 弥生 形水 醉々 梁

川柳大阪

ネクタイもきつちり痴漢朝を出る
 うぬぼれも消えて奇麗な顔になり
 強要もあつて参加に躍る労働歌
 名人の手並みに躍る活造り
 許さぬ罪を温泉宿の灯に重ね
 母の味花嫁修行に味見させ
 還々と来た温泉は沸し風呂呂
 延長が赤字路線の源つくり
 手料理でもてなす民宿母の味
 井戸水の味も故郷のなつかしさ
 辻褄が合いすぎている疑われ
 温泉へ来ては麻雀夜を明かし
 夏草と云う運命にある青さ
 風呂もあつて楽しい山のお湯
 欲ばけて萬病に効く只の水
 御馳走の料理を語る妻揚子
 正座して精進料理へ畏まり
 温泉にかれば何の苦も忘れ
 温泉に來てから無口になる女
 川柳後案 井上柳五郎報

兒島与呂志報

本蔭樟 笑虎 双醉 六竜 樂々 弘生 德松 雅果 凡々 九重 九平 胡蝶 魚人 秀峰 眉水 道子 与呂志 哲郎 比呂志 恒洋 定平 雷山 照路 幽廉 一高 たけ志

色っぽくなつたと花嫁からかわれ
 親の敷いたレールへ反抗の子がきしみ
 反抗の子の味噌汁が冷えてくる
 底冷えの世情は梨園の華に燃え
 反抗が過ぎて引き時見失い
 愛称で渡る故郷の橋がある
 愛称で呼ばば明るい妻の声
 愛称で呼ばなくなつた友の地位
 笑顔まだ消さずに男が耐えている
 石仏の笑顔は四季を言わず立ち
 十二月笑い忘れた日が続き
 家庭から笑いが消える妻が病み
 脱線をしないうレールを敷く夫婦
 脱線の証拠を妻に握られる
 どこでどう脱線したかベンチで寝
 脱線をさせてホステス腕の牙え
 反抗をするほど可愛い子煩惱
 倉吉打吹川柳会 奥谷

柳五郎 夏彦 昌吾 梁太 元一 芳明 七面山 正道 截嘉 博友 胡風 ひろし 秋月 久米雄 佐加恵 九坡 玉夫 弘朗報 満春 牛歩 みなと 秋女 京子 御竿 布堂 榮作 石花菜 卓三 夕路 杜の報 飛鳥

鳴き声が不吉と鳥もそう思う
終着駅で月を眺めては宿さがす
身構えて動かね蜘蛛に冬の音
ことと師走の厨灯をともす
気がつけば孫も反旗をふつて
ロッキード選挙と共に年も暮れ
集金を二軒残して暮れた愚痴
手のひらに夕暮れたためた淋しき日
枯木立オブジェのように暮れて行き
爪先で力一ぱい女耐え
垣根越し爪先立てて庭をほめ
爪先に日本女性を見せる足袋
通り庭爪先からの京の冷え
舞い落ちた紅葉は土にかえる色
散り敷いて紅葉友禅の柄になる
わたしは烏鶏の真似などほしない
川柳ささやま 河原みのる

白溪子 和友 求芽 紫香 笛珠 明代 比呂志 蘇堂 古月 よし子 客遊子 永樂 耕史 潮花 杜的 水客 千代子 越山 白峯 与志 久子 宗珠 可住 近江 百合子 喜美代 雀枝 とよ子

役員は自腹で飲んで疑われ
予定通り運んで幹事物足らず
川柳塔まつえ
家計簿の妻の努力を認めおき
べ切らぬままの家計簿引きつがれ
初孫へはすみのついたしめ飾り
難局に向う総理の初笑い
初がまに二十才の和服らしくなり
三カ日酒気爪先へしめてくる
家計簿の赤字を政府のせいにする
去く年の家計簿ボーナスでべる
減税の証し家計簿薄へ出す
時計も少しゆっくり回り三カ日
川柳たけはら 森井
不肖の子みそめてくれし娘に頼む
祈ること一つ増すなり娘の免許
どんぐりをみがいて子等のわらべ唄
片っぱの自信微笑を絶やさない
片言に振り回されたのしかり
長男は丸く次男は大の字に寝てなり
天下泰平ここにも恋が生まれたり
夕焼けに染まってみたい背のびする
後悔しないこととして今日の日記閉す
おっぱいの愛は知らない哺乳びん
標的がない観衆の眼にボルノ
亡母と話す墓標ヘトンボ来てとまり
大河有り胸に野心の火を燃やす
妻にだけ解ける方程式がある
とくせんのこほううどん食べに行き
じっとしておれない性をもてあまし
野良猫に睨まれながらシッコすむ

初音 文平 月報 みのる 三和 虎秋 愚童 緑之助 巡歩 鶴丸 孤呂二 通紅 叮紅 寄居報 静水 房子 鬼焼 蘭幸 文晴 笑子 寛美 浄美 千代美 かつ子 花炎 紫光 菁居 愛 不朽

雲漫歩秋の気ままな一人旅
安らげき心求めて墨みながく
許せなせぬ祖母の手編みのカーディガン
手ばなせぬ祖母の手編みのカーディガン
川柳わかやま 津田
善人の癖は自分の歩を見つめ
大阪が涙で暮れるあかんたれ
初詣で堅いこはぜへ決意する
過去消して無色の明日へ色を摸る
孤独させせて豊か色を着る
灰色に男の過去が塗つてある
汚れてる窓に昨日の色がある
自我の色消して白無垢家を出る
除夜の鐘余韻に黒い影がない
古稀を過ぎ女忘れぬ紅を注し
旗色が悪くて難癖つけたがり
嫌な癖つけぬ祈りのしつけ糸
癖一つエクボに変わる好きな人
手一杯本だけ寝床に運ぶ癖
髪の前鏡に小言二度三度
ババの癖二才の坊やによみ取られ
もうあかん後は頼んだ負け勝負
あかんよな苗を育ててものにする
その噂初耳として聞いておく
大臣の初心は霧でほかされる
堺川柳会 野坂つき子

一舟 鈍史 英詩 篤史 与史報 与呂志 雀踊子 としよ 好郎 千福水 福夫 道幸 与史 勇鳳 和雄 武子 寿子 元一 英子 天彦 恒治 光代 光代 邦晴 鎮彦 ミツエ 草春 茂美

柳影園 育美 勝雲 東一 儀一 清女 千萬子 与一 幸太郎 笑痴 天笑 宏子 小松園 圭水報 摩天郎 儀一 川狂子 圭水 維久子 天笑 勝美 柳信 綾女 清女 鎮彦 肖二

滋昌武
好一子
智二郎
作人
牧志
柳醉々
小松園
誓二
度
柳信
肖二
滋雀
あいき
鎮彦
一舟
頂留子
君子榮
好郎
文秋
弘生
弘生
満津子
右斗
一休
星四
三十四
ますえ

秀千晴つ恒炳 玉喜子 道子 美代 雅風 彌生 誓二 薰風 史好 水客 鎮彦 智仙 鬼遊 弥生 富子

— 61 —

雪はだまつて眠れぬ胸に灯をともし
日光月光菩薩は腰をひねり給う
都会での叫び山彦にはならぬ
魂のかげらを持つていた涙
何か叫びたい気持で街の風を聞く
魂のある人形は淋しがり
プラカード文字が叫んだようにはね
銭すこし貯めると心錆でくる
土鈴から女の小さき叫びきく
千年の叫びが聞こえそう埴輪
地球儀は大和魂ざらいです
少年の笛が都会で錆びていく
叫んでも踊らぬ軽い財布持ち
金脈を掘る鶴嘴をもった像
模造品ちよつぱり錆もつけて置く
雄叫びをしたら左遷が待っていた
川柳東大阪 竹中

夕花 肖二 雀踊子 凡九郎 漫柳 鬼遊 幸生 紀美代 鎮彦 史葉 美幸 洋子 醉々 頂留子 重人 肖二報 竹中 小松園 牧人 三十四 柴 雅風 肖二 美幸 天笑 柳宏子 儀一 醉々 古方

一と筋の愛貰いた束ね髪
稼ぎ確かめて愛情受け入れる
建具師の鳩尾にある深い傷
一枚の踏絵が鳩尾せめてくる
寺参りと云う息抜きで老達者
親に似る片意地をなぞ叱られる
似たような話でじつくり意見され
横顔も慈母観音に似るも母
一言が云えず横顔見て帰る
父親に似る短所は許される
だんだんと犯人に似せさすモンターシュ
まるべに川柳会 宮本茂児報
賽銭の入りで景氣を予告する
あの本もこの本もだけで三カ日
巫女さんも交替します労基法
公約はみな夢だった新予算
お正月一度は和服に身を包み
初詣みくじしつかと家路つく
受験生必死に書いた寺のかべ
北の友冬眠中ですと年賀状
悠少し持つて生きている楽しさよ
旧姓がつく賀状めつきり多くなり
割勘はたらふく食べると決めている
招かざる客がたらふく飲んで去に
新記録作ってかけそばただにする
オーエスケー川柳会 大坂
噂だけ千里走って風に消え
ふるりの賀状におびえる我身かな
子澤山年賀に名前並列し
片想い年賀状にて御伺い
バーゲンで母さん子供を忘れてる

右近 文秋 岳人 雀踊子 綾女 鬼遊 好一 喜風 弘生 誓二 和子 茂児 立兒 瓢太 幸子 幸弘 寿子 一於 つき子 千恵 幸子 好郎 星斗 形水報 一愈 吉敷 栄 井川 松尾

忘年会不景氣風に酔えぬ顔
忘れてたお袋の味が妻の手に
物忘れがひどくなつた母の腰
墨痕鮮か恩師からの賀状
忘れものなかつた父を不案がり
親しげに話し名前が出て来ない
殴られた鼻血のことが忘れられぬ
天井を走る鼠も十二月
小走りで用事をする十二月
新婚の二人名で出す年賀状
年賀状刷る程も出し独り者
結局は謹賀新年しか書けず
犬だけが走っていない十二月
忘れたい酒飲むほどに冴えてくる
年賀状に今年もこつて十二月
大田川柳句会 藤田軒太楼報
節分に豆まき祈る世の平和
節分は春待ち顔の猫やなぎ
年男大いな声の豆つぶて
まじないに節分の豆残し置く
節分祭賽銭箱の鬼追えず
鬼は外福は豆撒く子供達
福豆を受けに新雪踏みしめる
初孫の結ばれて行く暗れ姿
結ばれた塗端酒飲む婿となり
結び目が二人の仲で初詣
結び目が一生切れぬ俺と妻
鉢巻を結ぶその手に孫を抱き
蝶結び祝う二十の揃う花
七五三蝶に結んで鳩を追う

みどり 貞彦 秀成 亜泉 博一 聖地 千夢 聖也 野夢 常坊 幸一 弥生 形水 入仙 愛甫 雪美 秀子 立雲 三三男 軒太楼 以志 水煙 義雄 祥月 胡秋 休二郎

海と山結んで続く姉妹都市
姿見へ成人の顔でまき上り
顔馴染み古い再促言いそびれ

虹川柳倶楽部(唐津市)新岡回天子報

お隣りの無縁墓にもアカの水
靴掲げて素足で緑を歩きたい
梯子車の高さはビルに追付かず
忙がしく歩いて後を振り返り
おさがせてブルトーンザ通り抜け
旅の宿あそここの部屋客は誰
宿怨の友と今夜は酒を汲む
植林のみどり榮えて山肥える
濃いみどり芝生に足を休ませる
国体は緑のこして暮を閉じ
三寒四温、四温忘れた寒つづく
片袖を濡らした傘が縁となり
詩に唄に私がいます柳の芽
新春を鰯腹いける友があり
三井が丘川柳会 高田 博泉報
飛行機で名刺をまいてみませんか
心にも引出しが有る愛の部屋
思春期の抽斗全部鍵を掛け
年の瀬は棒の如くに日が暮れる
引出しへ幼い恋をとり込める
年末のふところ妻も娘もねらう
引出しに母の匂いをみつけれ
ためらいの手紙引出しの底にある
肩書がとれて雅号にする名刺
捨て石のつもり名刺を置いておく
年末を迷惑なとこに猫寝でる
抽斗の嗜着も出番のお元旦

緑の助 虎 孝太郎 五木 照 廣 実 岩 光 堀 治 一 竿 風 鈴 久 隆 紫 浪 勝 一 虹 汀 回 天子 博 泉報 凡 九郎 隆 子 惠 美子 よしひろ 吟 風 あいき てまり 亜 成 亜 鈍 野 生 一 念 三 郎

やられたか抽斗みんなあいている
抽斗へ強壮剤を忍ばせる
引き出しをひっくり返しているパンツ
階段にきしみ引出しそつとしめ
名刺百枚男盛りのすぐに減り
抽斗からゼロの通帳こぼれ出る
年末の日溜り犬が寝ていただけ
開けたらあかと抽斗押えつけ
引出しの指輪も今は要らぬ年
名刺出したのに違う名で呼ばれ
高官の引出し整理されている
花名刺莫迦な遊びをしたものだ
胸のすく啖阿切りたい大三十日
年末に葉牡丹だけは色冴える
ゆうもあ川柳会 榎谷
年毎に重なる望み孫に変え
特売日でも松たけはにおいだけ
男ばかり母の嗜着がよく目立ち
えさ代を見積って見るびくの中
人間もバックミラーをつけようか
ハワイ川柳ウイロー社 小島
朗々と卒寿の祖父の謡い初め
口だけの健康法で医者がい
健康を氣遣う妻の子沢山
健康の裏で病魔が待っている
健康体おれにも一つ取り得あり
健康で今年も過ぎた年の暮
先ず健康地位や名譽は何のその
趣味に生き奉仕も出来る健やかさ
孫を抱くに惜しいかいなの力瘤
健康で新春迎えこの笑顔

亜也子 牧 人 小 路 度 三千子 博 泉 柳 宏子 古 方 琴 音 珠 笑 形 水 鬼 遊 小 松園 薰 風 漫 柳報 漫 重 きくえ 優 子 不二 みのる 風 影報 峰 円 紅 溪 一 葉 十 吉 公 女 蒼 蛇楼 カロ女 風 影 蒼 生

百葉の長た盃振って見せ
健康で今年も嬉しい初詣
浮きしずみしても健康に自信あり
健康に勝る仕合わせ外に見ず
晩酌が健康法とは微笑まし
腹八分守る長生きする自信
計報聞く我が健康に手を合せ
嬉しき今日は今日も丈夫で人の世話
遠くおる娘の健康祈る朝
川柳しんぐろ
大いなる嘘が並んでいる目次
目次には載らぬ人生の役回り
どの目次繰れど六法味方せず
くず糸をつないで織った母の腕
底辺で血のつながりの価値を知り
趣味が縁知らぬ人とも手をつなぎ
つなぐ手をブランコにして父母がいる
新年へつなぐ余命の鐘をつく
子につなぐ親の気持を子が知らず
土壇場の涙破局をつなぎとめ
お星様つないでロマンの国に居る
保育器に小さな生命つながらる
遠々に食えて父に遠い距離
別々に食えて父に遠い距離
感想へ母が居てほし施設の距離
感想文書けと言われて読み直し
感想を用意して来た勝つ自信
同じ本読んで感想にある相違
感想の本音日記に書いてある
愛想の語尾をにがしてから無口

曉 舟 小 雪 草 海 柳 子郎 拜 山 北 海 万里 三 石 雪 女 輪 報 凡 九郎 輝 寿 十 郎 操 としよ 華 水 功 まき子 多 四郎 寅 蔵 弘 生 溪 水 大 輪 富 一 喜 平 城 与 史 寿 子 武 雄 雀 踊 子 幸

募集

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

五月号発表 (3月15日締切)

川柳塔 (10句) 中島生々庵 選
水煙抄 (10句) 菊沢小松園 選
愛染帖 (3句) 橘高薫風 選
課題吟 (各題5句以内)

「デモ」 森井菁居 選
「新茶」 野村岬月 選
「鶉」 越智一水 選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

六月号発表 (4月15日締切)

川柳塔 (10句) 中島生々庵 選
水煙抄 (10句) 菊沢小松園 選
愛染帖 (3句) 橘高薫風 選
課題吟 (各題5句以内)

「洗たく」 河原みのる 選
「時間」 植村客遊子 選
「移住」 小幡里風 選

一人の遅稿 大ぜい困る

定価 三百五十円 (送料29円)

半年分 二千二百五十円 (送料共)

一年分 四千二百円 (送料共)

昭和五十二年二月二十五日印刷
昭和五十二年三月一日発行

大阪府南区鰻谷中之町二〇番地
編集兼 発行人 中島蓬太郎
印刷所 藤原童心社
郵便番号 542
大阪府南区鰻谷中之町二〇番地
発行所 川柳塔社
電話 大阪・二七一三九八五番
振替口座 大阪・三三三六八番

本社三月句会

日時 三月七日(月) 午後六時
会場 金属会館
南区鰻谷東之町10番地
電話 271・3935番

兼題 「慣れ」 「潜む」 「丹念」 「砂漠」
柳話 若本多久志 (今月の出題・谷垣史好)

席題 正西香板 本田柳 水客 選
費題 二題 当日発表 各題三句以内厳守

★投句だけの方は切手百円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鰻谷中之町20

川柳塔社

4月の兼題 「新入学 気合い」 「摘む 果」

4月句会は7日(月)

5月句会は8日(日)

・一般購読料改正・
不況と物価高に耐えてきましたが、それも限界にきましたので、四月号から本誌一部四百円に改正させていただきます。ご諒承のほど、よろしくお願い申し上げます。(ご送金済みの方は次回から改正料金でいただきます)

・お願い・
ご送金は早目にお願いたします。会費が切れますと休会とみなし送本を中止いたします。

川柳塔社

カッケー 肉体疲労時の ビタミンB₁補給に アリナミンA

☆筋肉痛・肩こり・腰痛・神経痛の緩和にも
☆アリナミンA 25ミリ錠のほかに5ミリ錠



・ペンペン草・

「麻生路郎物語」完結
★51年新年号から本号まで
毎月十二・二枚という労作
で読者を魅了した、東野大
八先生ならではの「麻生路
郎物語」もあと二回補筆さ
れ、五月号で完全終結とな
る。ほんとうに苦勞様で
した。

「旅人」普及版
★蕉風氏を中心に「旅人」
普及版は完成へ一歩一歩進
んでいる。今月あたりから
エンジンがかかる。

五月八日

★楽大会委員長は早や早や
と会場へ向かう、遺漏のな
いよう視察するなど、大会
成功へ意欲的である。

出版記念の会
★パーティなど、およそア
ルコールの出るところへは
あまり出席しないが、出版
記念の会だけは自分の勉強
にもなることであり、勉強
のゆるせるかきり顔を出す
ことにしている。

★1月28日の「上方芸能」
の発刊五〇号記念祝賀の会
が本町の「大阪会館新館」
31階で開かれた。31階とい
えばボクの新記録で、はじ
めて見る大阪の夜景はワ

▼葉子コーナー

▼小高い山の樹木のトン
ネルをスキーで滑ります
と、枝の雪が「バサッ」
と頭落到てくる時があ
ります。

▼大きい雪の固まりの時
など、小さな私は尻餅を
ついてしまいます。

▼腹癒せに後から滑って
来る人に木を揺すり、ド
サッとする音と共に体中
が真っ白になって転がる
のを楽しんだものです。

ンダフルだ。参加者の顔ぶ
れは多種多多彩で作家、芸
人、等々である。NHKか
らもニュースカメラがナマ
放映のため飛んでくる。隔
月刊で五〇号うちは月刊
で六百号。川柳をもっと売
り込みにやあ……。

★この日、愉快なことに、
若い編集部の人がボクを見
佐世保中学のご出身なので
すね。たしか第三期卒業生
と名簿にありました。が、わ
が母校から、こんな立派な
方のおられることに鼻が高
いです」と。

★また、堺市の民俗学の会
長をしている人から「松本
に川柳をやっている友人が
います」と云われ、「石曾
根民郎さんですか」と聞く
と、「そうです、そうです」
と、しばらくは川柳の話に
花が咲いた。(拙著「川柳
寄席」の句はここの雑誌へ
出してもらっていた)

★この日のもう一つ、愉快
な話。上方落語協会長の笑
福亭松鶴師が、「父が(五
代目松鶴)戦前「上方ばな
し」という雑誌を出しとり
ましたが、その印刷代に追
われましてナ家庭はワヤで
した。本を出すちゅうこと



たのしさひろがるお買物



阪急

はえらい損をするもんで
な。その時の借金を、いま
も払ろうとりますね」
★この「上方芸能」誌は印
刷を本業にする人が出して
いるので安く仕上がる強み
を持っていて。育ての親の
一人に秋田實先生がおられ
ながら、芥川賞・直木賞作家
などがタダで原稿を書くとい
う、これも強みである。

★発起人がこれまた多彩で
一、秋田實、小松左京、藤山
義一、片岡仁左衛門、藤山
寛美、笑福亭松鶴、桂米朝
諸氏。参会した百五十人も
それぞれ異色。会の進行な
ど教えられるところが多か
った。
★今冬は記録的な寒波の襲
来とやらで豪雪だよりがし
きり。大阪市内も珍しく雪
が五センチ積ったが、ボク
自身、あまり寒さを感じな
かった。ので、昨秋10月か
らまったく同じ服装で過ご
してしまっただけである。うす
いシャツと胸のあいたスポ
ーツシャツという軽装。無論
コートは手に通さずじまい
だった。ヤセ我慢でもなん
でもない、カゼ一つ引かな
かったのだから。
(不二田一三夫)

＜出張店＞ なんば高島屋／虹のまち鹿鳴／心齋橋そごう／梅田阪神／天満橋松坂屋
京阪デパート／堂島地下センター／中之島サン・ストアー／なんば新川店／奈良近鉄百貨店